

燈 光



9



みちのく灯台プロジェクト

「あおもリアスパム灯台ポスト」事業開始!

青森海上保安部交通課



青森港北防波堤西灯台（青森県青森港）は、1961（昭和36）年11月15日の初点以来、永きにわたり青森港に入出港する青函連絡船等多くの航行船舶の安全を見守ってきました。同灯台は、当初、どこの港にも

あるような白色塔形の防波堤灯台でしたが、平成16年、港や防波堤の景観にマッチするよう青森市の背後に広がる八甲田山をモチーフにした現在のデザインに生まれ変わっています。直近には青森市のランドマーク



青森港と青森県観光物産館「アスパム」

の一つとなつてい
る高さ約76メー
ルの正三角形の建
物、青森県観光物
産館「アスパム」
があることから、
以来、同灯台はそ
の形状から「アス
パム灯台」と通称
され、多くの地域
の方々に親しまれ
てきました。

青森海上保安部では、ここアスパム灯台においても「みちのく灯台プロジェクト」を推進しておりますので、その概要を次のとおりご紹介します。



新たにペイントが施されたアスパム灯台

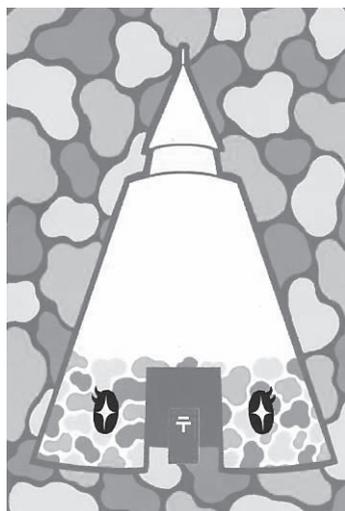
●「あおもりアスパム灯台ポスト」事業開始

令和3年7月22日(木)、アスパム灯台にて「あおもりアスパム灯台ポスト」事業が特定非営利活動法人あおもりみなとクラブ(渡部正人理事長)により開始されました。口に見立てた灯台基部の通路をくぐり灯台正面に設置された郵便ポストに願いを込めて投函すると、灯台が願いを飲み込み成就するというストーリーリーのもと、アスパム灯台陸上側の一部には地元デザイナーにより水をイメージしたペイントが施されました。

同日、「灯台ポスト完成除幕式」が開催され、小野寺晃彦青森市長、山下雄一郎青森海上保安部長ら関係者が除幕をして完成を祝いました。周辺の青森市中心街ではアスパム灯台等が描かれた特製ポストカード



灯台ポスト完成除幕式 (ポスト投函)
※青森海上保安部長によるポスト投函 左は青森市長



特製のポストカード

が無料で配布され、また、期間中に投函された手紙やはがきには特製の消印が押印されるということもあり、初日から多くの家族連れで賑わいました。周辺の青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸、ねぶたの家ワ・ラッセや青森県観光物産館アスパム等とともに青森市のベイエリアを一体に楽しめる新たな観光名所の一つとなることが大いに期待されています。

なお、同ポストには、冬期に灯台までの通路が閉鎖となる前の11月30日まで、9時から20時までの間、投函可能です。



特製の消印

● アスパム灯台ライトアップ

青森海上保安部では、「あおもりアスパム灯台ボスト」事業開始を記念し、令和3年7月22日(木)の日没から21時まで、同灯台を初めてライトアップしました。

同日、青森駅前に新たな賑わいの拠点として完成した「あおもり駅前ビーチ」においてもライトアップ等夜間のイベントが開催されており、訪れた多くの人々がビーチと共にSNS映えするデザインとなった夜間のアスパム灯台の風景を楽しんでいました。



ライトアップされたアスパム灯台



「あおもり駅前ビーチ」における
イベント状況とアスパム灯台

● アスパム灯台パネル展

青森海上保安部では、「祝 アスパム灯台点灯60周年(還暦)」と題したパネル等を作成、周辺の青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸やあおもり北のまほろば歴史館に展示し、多くの来場者に「アスパム灯台60年の歩み」や「航路標識の役割」(次頁参照)を紹介しています。

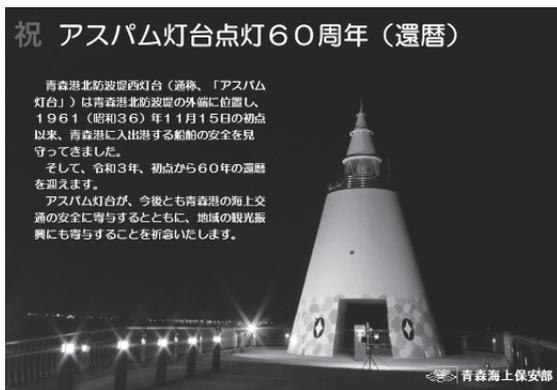
青森海上保安部は、今秋開催予定としている大間埼灯台点灯100周年記念式典や大間埼灯台ライトアップ等各種イベントを通じ、これからも地域の方々とともにみちのく灯台プロジェクトを推進して参ります。

祝 アスパム灯台点灯60周年(還暦)

青森港北防波堤西灯台(通称、「アスパム灯台」)は青森港北防波堤の外端に位置し、1961(昭和36)年11月15日の初点以来、青森港に入出港する船舶の安全を見守ってきました。

そして、令和3年、初点から60年の還暦を迎えます。

アスパム灯台が、今後とも青森港の海上交通の安全に寄与するとともに、地域の観光振興にも寄与することを祈念いたします。



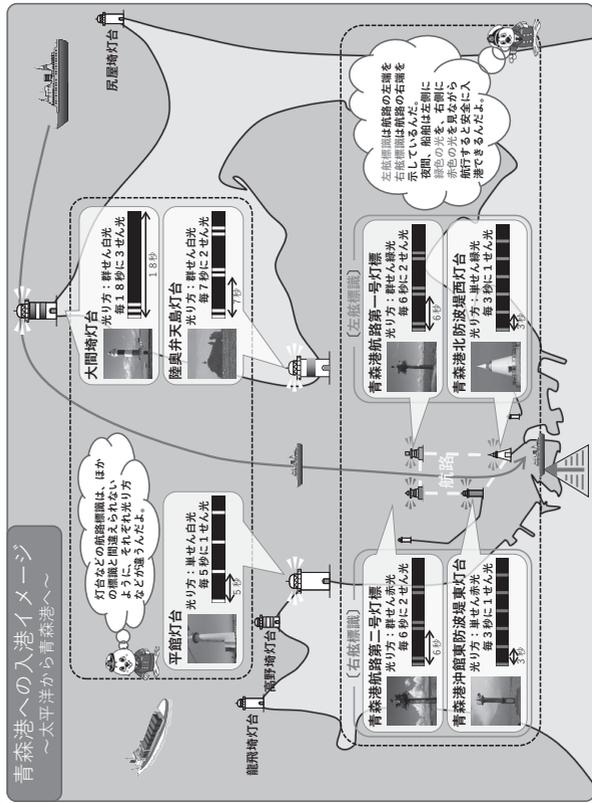
パネル「祝 アスパム灯台点灯60周年(還暦)」

航路標識の役割

航路標識は、灯光、彩色、形象、音響、電波等の手段により、我が国の沿岸水域を航行する船舶の指標とするための施設であり、岬の先端に立つ灯台、岩礁などの障害物の存在を知らせる灯標、航路の入り口を示す灯浮標に代表され、その設置目的に応じて種類が異なります。また、外国船舶も含め不特定多数の船舶が広く利用することから、塗色、形状、灯色、光り方等の性質に関して国際的な基準があり、我が国においても国際的な基準に準拠しています。

船舶は、特別な航法の規定がある海域を除き、自由航行が原則であり、水深と自船の喫水との関係から安全かつ能率的な航海計画を立て、その航海計画に基づき常に自船の位置を確認しつつ、航行上の危険となる岩礁や構造物などの障害物を避け、目的地まで航海します。

航海する船舶にとって航路標識は、自船の位置や障害物の位置を確認する際に必要不可欠なものであり、船舶交通の安全確保を図るため、重要な役割を果たしています。



パネル「航路標識の役割」

いわき・とよま・夏の天空を優雅に泳げ！

塩屋埼灯台に『かつおのぼり』を掲揚しました

とよまの灯台倶楽部 部長 小野陽洋



【はじめに】

昨年結成した「とよまの灯台倶楽部」は、おかげさまで9月15日に1周年を迎えました。「塩屋埼灯台点灯120周年記念事業」を契機に、個々に抱いていた灯台愛を結集し、塩屋埼灯台と周辺への植栽や灯台記念日に合わせた行事、

塩屋埼灯台に関係する資料展を催しながら良縁を育んできた成果が息づいています。読者の多くからもご理解、ご支援を賜っておりますこと、まことにありがとうございます。

昨年来のコロナ禍に憂慮しつつも、年明け



『かつおのぼり』掲揚全景

早々、三が日から塩屋埼灯台へ仲間が集まって、倶楽部としてどんな活動を展開するか検討してきた中の一つに『かつおのぼり』が起案されました（『かつおのぼり』については、後ほど詳説します）。月に一度ベースの定例会とグループSNSを活用したコミュニケーションを通じて実現可能性を確かめながら、ターゲットを「海の日」（今年7月22日（木））の4連休に設定して実施しました。

【いわきとカツオ】

塩屋埼灯台がそびえるいわき市平薄磯。ここから北へおよそ10キロメートルのところに、四倉諏訪神社があります。神社に毎年4月1日から5月中旬の間、『かつおのぼり』が掲揚されます。一本のポールで屋根より高く掲げられるその見た目は、端午の節句で飾られる鯉のぼりを、カツオに置き換えたものです。平成18年から、震災に見舞われた平成23年と翌24年を除いて

毎年掲揚されています。カツオに支えられ先人が活躍した時代に思いをはせ、まちの多幸繁栄を願う、海と共生するいわきならではの光景です。震災後は地域の早い復旧、復興を願い、人々の士気を鼓舞する意味も込められました。カツオが力強くまっすぐ泳ぐ姿は、灯台が鋭く放つ光の筋とも重なるものがあるように感じます。

さて、いわきとカツオのかかわりをさかのぼると、江戸時代ころから沿岸はカツオ漁が盛んで、カツオが大量に水揚げされていました。水揚げされたカツオは鰹節に加工し出荷され、それは昭和50年代ころまで続いています。前述の四倉諏訪神社には「改良鰹節之碑」が建立、安置されています。

初ガツオが水揚げされると、塩屋埼灯台からすぐ北西に位置する沼ノ内弁財天へと奉納する習わしがありました。明治時代にはいわき湯本、常磐の金刀比羅神社（こんびらさま）にも、大漁に感謝する漁師によってカツオが奉納されました。

灯台からおよそ10キロ南に、いわきの海の玄関口である小名浜港があります。夏の訪れを告げる初ガツオの水揚げ。市民の人気の的である新鮮なカツオは厚切りの刺身となって食卓へ並び、にんにく醤油や、塩と

薬味で楽しめます。煮たり焼いたり揚げたり、薫焼きのタタキにしたり、あら汁で頂いたり、いろんな味わい方があります。

いわき沖は潮目の海（親潮と黒潮がぶつかる海域）として知られ、「常磐もの」と呼ばれる海の恵みが豊富です。カツオは、春はエサを求めて北上し、秋にはエサをたらふく食べて脂がのった戻りガツオとなって塩屋崎沖を泳いでいます。

【成功への苦悩】

3月中旬に開いた灯台倶楽部定例会において、当倶楽部の団体会員である福島海上保安部と燈光会塩屋埼支所の合意も得て、『かつおのぼり』掲揚の実施を決定しました。

当倶楽部の会員の一人が、前述の四倉諏訪神社での『かつおのぼり』掲揚に携わっているため知見があり、そこでの資料をお借りできることになりました。本家「四倉での掲揚が5月中旬まで続くことから、この日に合わせて塩屋埼灯台で掲揚することは難しく、どの時期が適当かを検討した結果、カツオが旬を迎え、浜には海水浴でにぎわいが出てくる「海の日」のタイミングが持ち上がりました。今年は祝日移動に

よって4連休となり、特に多くの方に足を運んで頂けるチャンスととらえました。

塩屋埼灯台：ふもとに住んでいると、その過酷な環境を顕著に痛感します。冬の強い北風、春も偏西風が強く、夏から秋にかけては台風や低気圧がもたらす強烈な海風。年中通して、「風が強い」印象を覚えます。しかも塩屋埼灯台は岬の突端で高さは海拔70メートル近く、その強い風（灯台上では「暴風」と言っても過言ではありません）にまともに晒されます。「海の日」という選択は、春から夏へと風が変わり、ぎりぎり台風の接近、上陸も免れ、梅雨空からカンカンに陽が照る時期となり、天候上も貴重なチャンスだと思えました。

塩屋埼灯台では灯台記念日などに「万国旗」や、先の震災10年展示のように「姫花ちゃんハンカチ」と寄せ書きのフラッグを掲げることはしてきました。しか



万国旗を掲揚した事例

し、「かつおのぼり」はおろか鯉のぼりも吹き流しも揚げたことがない中、その強風に対応できるか、また掲揚するため

のロープをどう張り渡すか、が懸念事項として上がりました。

万国旗の場合は、灯台上部の展望デッキ手すりの根元から、灯台を囲う柵に向けてかなり鋭角に張り渡すことで、灯台の周りをシャープに彩ることができました。今回は『かつおのぼり』や吹き流しで、それぞれ全長が2メートル近くあるため間隔に十分なゆとりを持たせたいと考えました。仲間の頭には共通して、たとえ川の兩岸から真横に張られたロープに、川の流れに沿うように鯉のぼりが並んで泳いでいるイメージが浮かんでいました。

塩屋埼灯台でロープを横に張る：灯台から、受付と展示室がある建物に向かって東西方向に伸ばせれば、



借り受けたのぼりポール

参道を歩く方にも、ふもとの海岸からも、『かつおのぼり』が泳ぐ姿が見えることは想像できませんでした。このとき問題になるのは、灯台からロープを延ばす都合上、大きな「高低差」を生じてしまうことでした。地上（参道）側のロープをどこまで高い位置で保持できるかが肝になります。駐車場から塩屋埼灯台までは高低差50メートルほどの崖に九十九折に設けられた石段を上っていく必要があります、高さを稼ぐための「長尺な柱となるもの」を持って上がるのは容易ではありません。幸い、四倉諏訪神社から借り受けたのぼりのポールが伸縮式で、縮めた長さが2メートルほどに収まっていたので灯台まで運んでから、5メートルを超える長さまで完全に伸ばし、上部の滑車部分をロープの始点とすることで高さを稼ぐことにしました。

7月最初の日曜日、梅雨の合間の止み時を狙って設営リハーサルを行いました。ポールをどの位置に立てるかで、高低差と



ポール設置位置をリハーサル

同時に、海岸や灯台下の雲雀之苑（駐車場に隣接して、歌手美空ひばりの石碑が立つ位置）からの見え方にも影響します。また、灯台から一つ目の吹き流しまでの距離と、各のぼりの間隔を調整して、海岸から見ても、参道から見ても、展望デッキから見ても不格好にならず、かつ強風によって灯台に絡みつくことがない位置関係を納得できるまで突き詰めました。

最後まで気が休まらないのは天気予報と風の出方。前の週に当月の定例会を開き、掲揚と撤収に集まれる仲間と時間、会期中の見守り担当者、掲揚見合わせの条件を確認して、ハラハラとワクワクを抱えながら当日を待ちました。

【夏のいわき沿岸と灯台へ足を運ぶきっかけに】
塩屋埼灯台のふもと、すぐ北側には、いわき市内で



使用した『かつおのぼり』

特に集客数が多い「薄磯海水浴場」(2017年再開)が広がり、南側にはサーファーが良好な波を求めて集まる豊間海岸(海水浴場は震災後休止中)があります。コロナ禍によっていわき市では昨年に続き今年も海水浴場の開設が見送られ、また感染拡大防止のために行動の仕方も考えさせられる状況下で、夏の気持ち良い海のまちへの客足が遠のいている感覚を覚えます。

いわき市内では3月下旬から4月中旬にかけて感染者数の拡大があったことから、市が「感染拡大防止一斉行動」としてゴールデンウィークを前に公共施設の休館や様々な行動自粛を呼びかけました。これにならって塩屋埼灯台でも4月末から5月いっぱい、参観休止を余儀なくされました。本来ならば春の行楽シーズン、陽気に誘われて客足が伸びても良いはずでした。

また、昨年11月から今年3月末まで、灯台下の道路が改良工事で通行止めとなっていました。南側からいらした方は内陸を迂回しなければならず、北側には「通行止め」のバリケードがあるため、「塩屋埼灯台まで立ち入れない」と誤解を招く状況もあって、SNSなどを通じて情報発信を続けても参観者数は寂しいものでした。

県道が再び通れるようになり、6月1日(火)から

塩屋埼灯台の参観を再開したものの、人々の行動様式が変わってしまい以前のようなにぎわいが全く見られません。塩屋埼灯台のすぐそばに、いわき市の震災伝承施設「いわき震災伝承みらい館」があり、筆者は同館で月に数回震災語り部として登壇していますが、こちらも興味を持って訪れる方の数が極端に減ってしまったことを感じてしまいます。

とにかくストレスがたまりがちな世の中で、海のみちへ出かけて潮風になでられたり、波とたわむれたり、白亜の塩屋埼灯台が放つオーラからエネルギーを貰ったり、周りとの間隔には配慮しつつマスクを外してり

【広報資料 (R3-灯台01)】 令和3年7月

塩屋埼灯台に『かつおのぼり』を掲揚します

主催：とよまの灯台倶楽部
期間：令和3年7月22日(木)から25日(日)まで
(時間は、朝9時～夕方16時30分)
場所：塩屋埼灯台 構内 (いわき市 平澤磯 字宿崎 34)
※ 期間中の天候により、掲揚を見合わせる場合があります。

いわき市の東端、海拔7メートルの新崖上につく、登れる灯台「塩屋埼灯台」は、点灯開始から121年が経過。現行塔体は過酷な環境で81年光を放ち続けています。「日本の灯台50選」にも選ばれ、朝年々さらば海の青とのコントラストが素晴らしい景勝地として多くの観光客が訪れますが、昨年度のコロナ禍の影響によって参観休止を余儀なくされた期間があり、現在も参観者数が少ないままです。

梅雨明けと共に夏休みを迎え、子どもたちの声がかかるもとの浜から聞こえるところで、市内の海水浴場は今年も休止され、人々の沿岸への足が遠のいているように感じます。

このような状況の中、鯉の力強さと縁起にあやかり、『かつおのぼり』を塩屋埼灯台に掲揚することになりました。強い日差しと夏風を吹き寄せ青空に泳ぐ鯉姿に、子どもたちの賑やかな成長と、夏再の訪れを祈っていたけられ幸いです。



おうちの窓から、お庭から、道路沿いから、
豊間漁港や豊雀乃瀨から、
ゆっゆと上ってきて受付前から、さらに上って展覧デッキから、
あるいは沖合や空から！
お気に入りの角度を見つめてのんびり観てね～*

『かつおのぼり』掲揚の告知資料

フレッッシュして頂けたら、というのが、浜のそばで生まれ育ち暮らしている筆者の願いです。この普段の浜の風景に『かつおのぼり』が泳ぐことで、夏の到来や自然の力強さを感じ取り、心の癒しに繋がって欲しいと考えました。

7月19日(月)に塩屋埼灯台へ『かつおのぼり』を掲揚することをメディアへ公表したところ、たくさんの注目が集まりました。

【塩屋埼灯台の新たな名物へ】

連休初日、7月22日(木)海の日朝8時、開門1時間前の塩屋埼灯台に仲間が集まり、事前リハーサルを思い出しながら『かつおのぼり』を掲揚しました。気温が高く海水温が低いのか、海から連続して霧が立ち込める幻想的な雰囲気の中、公開をスタートしました。『かつおのぼり』の珍しさや、「何かやっているな」という雰囲気誘われて、朝から続々と参観者が訪れてくださいました。

7月22日(木)の海の日から25日(日)まで4日間、天候は崩れることなく、『かつおのぼり』にはやや物足りないほど風も穏やかな中で無事に掲揚をすることができました。6月1日に参観を再開してから、平日

は一日20名程度、休日でもなかなか100名を超えない参観者数でしたが、4日間の合計で700名を超す参観者に恵まれ、一日で220名を超えた日もありました。子どもたちや芝生広場まで登ってきた人を含めると1,000名以上が間近で

雄大な姿を目に焼き付けてくれました。灯台下や南北の海岸と海岸道路、近隣住宅からもよく見え、さらに多くの方々が優雅に泳ぐ『かつおのぼり』を楽しみましたものと思います。

7月25日(日)の夕方、『かつおのぼり』



ひまわりも灯台と『かつおのぼり』を見つめる



朝から多くの方が参観に訪れた

の撤収を終えた塩屋埼灯台には、ふたたび海霧が立ち込めていました。夜になると台風の接近にともない風が吹始めました。毎年神社に掲揚されている『かつおのぼり』だからこそ、会期中の平穏な天候を連れてきてくれたのかもしれない。

いわき市では、例年海の日の連休に合わせて海開きが行われ、海水浴場がオープンしてきました。梅雨明け前後で比較的天候も良く、風も穏やかな日が多い時期です。いわきの海に夏の訪れを告げる「塩屋埼灯台への『かつおのぼり』掲揚」、今年の成功を大きな弾みに、来年以降も海の日の連休恒例行事へと定着させて夏休みスタートの起爆剤にしていきたいです。

盛夏のひとつときだけ拝める風景が、今後の灯台絵画コンテストの素材としても面白いのではないのでしょうか！



らせん階段を進むと、途中の窓が額縁となる

2021年 入道埼灯台の参観について

入道埼灯台の参観業務は、
11月3日(水)までとなっております。
皆様のご訪問をお待ちしております！

灯光会入道埼支所 ☎ 090-1931-9706

灯光会事務局 ☎ 03-3501-1054



最新の参観状況につきましては、
当会HPをご覧ください。

灯光会HP
QRコード



<https://www.tokokai.org>

灯台をめぐるまなざしの変遷

The Transitions of the Tourist Gaze around Lighthouse: A Case Study of Inubosaki Lighthouse

— 犬吠埼灯台を事例に — (2) 3

一般會員 關 愛里

第4章 銚子と犬吠埼灯台の概要

1. 銚子の概要

(1) 銚子の発展

前章では、灯台の歴史と現在、そして灯台と観光について整理した。本章ではまず、研究対象である犬吠埼灯台の位置する銚子の概要について述べていく。銚子は、関東平野の最東端に位置している。1933年2月、銚子町、本銚子町、西銚子町、豊浦村の3町1村が合併し、千葉市に次いで2番目の市として誕生、その後、1937年に高神村、海上村などと順次合併を繰り返し発展してきた。銚子の主要産業は、漁業、農業、水産加工業、醤油産業である。中でも、漁業は盛んであり、銚子漁港の水揚げ量は、2011年から6年連続日本一を記録しているという（銚子市漁業協同組合 2018）。銚子は、江戸時代、関東の三大



図表4-1 千葉県銚子市
(出典：銚子市HP「銚子市の位置・地勢」)

都市の1つとして発展してきた。銚子商工会議所によると、銚子は、江戸時代に利根川が整備されたことにより、江戸から銚子までの利根川水運が開かれ、主に

米などを運ぶ拠点になったという。その後、漁業と醬油醸造が発展し、港町が形成された（銚子商工会議所 2018）。

9 銚子市HP「銚子市の位置・地勢」(最終閲覧日2020年12月11日)

[https://www.city.choshi.chiba.jp/sisei/about_choshi/profile/ichi.html]

(2) 銚子の観光

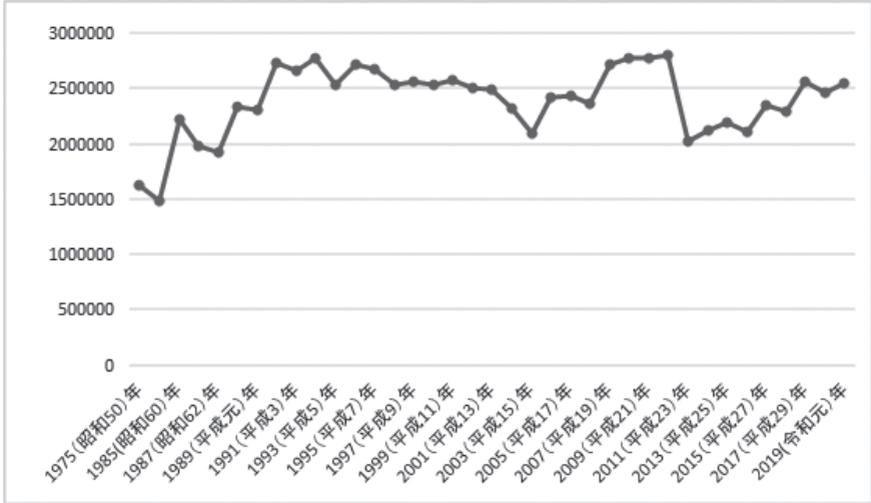
利根川の整備は、銚子の産業だけでなく、観光にも影響を与えた。日本遺産北総四都市江戸紀行活用協議会によると、利根川水運によって、人の往来も活性化し「銚子磯巡り」などの船旅を楽しむ江戸庶民の小旅行が流行したという¹⁰。「銚子磯巡り」とは、香取神宮、鹿島神宮、息栖神社の三社を参詣する東国三社詣のオプショナルツアーとして、円福寺などの寺社や「犬吠ヶ埼」など激しい波浪によって生み出された奇岩からなる自然景観などを巡る旅である¹¹。2016年、銚子は、漁港や港町、磯巡りの観光客で賑わった都市として、日本遺産「北総四都市江戸紀行・江戸を感じる北総の町並み」に認定された¹⁰。磯巡りが流行した銚子は、

江戸時代から観光客で賑わっていたのである。

銚子の観光客数の推移は、図表4-2の通りである。銚子市によると、昭和50年代には160万人から180万人台であったが、1985年に銚子を舞台にしたNHK朝の連続テレビ小説「滯つくし」が放映された影響を受け、222万人の観光客が訪れたという（銚子市 2004）。その後は一旦減少したが、1988年以降は増加した。そして、1991年以降は増減を繰り返し、2011年には東日本大震災の影響を受け観光客数は大幅に減少した。近年ではわずかに増加傾向にあり、震災前の観光客数に戻りつつある。先述した国内観光の流れを踏まえてみていくと、1970年代から1980年代の国内観光の成長とともに、銚子の観光客数は増加した。しかし、1990年代から国内観光が衰退し始め、銚子の観光客数の伸びはみられなくなった。そして2000年代に入ると、国内観光の衰退はさらに進んだが、銚子の観光客数は増加傾向となり、震災前の観光客数に戻りつつある。

10 日本遺産北総四都市江戸紀行活用協議会HP「北総四都市江戸紀行ストーリー」

(最終閲覧日2020年12月11日) [<https://japan->



図表 4-2 銚子の年間観光客数の推移
 (出典：『続銚子市史』、銚子市役所観光商工課提供のデータを基に筆者作成)

heritage.bunka.go.jp/ia/app/upload/
 heritage_data_file/023797342798107938.pdf)
 11 日本遺産北総四都市江戸紀行活用協議会HP「銚子の磯巡り」
 (最終閲覧日2020年12月28日) [https://hokuso-tcities.com/spots/detail/97/]

(3) 銚子と犬吠埼灯台

次に、銚子と犬吠埼灯台の関わりについて整理する。犬吠埼灯台は、建設当時、銚子にとって、文明開化の象徴のような存在であった。犬吠埼灯台は、銚子の文明開化の新施設の1つであり、銚子で新文明のトップを切ったものとして、銚子の人々をおどろかせたという(篠崎 1956)。また、犬吠埼灯台は、建設以来、銚子のシンボルにもなっている。それは、『銚子市史』において、「銚子はこれによって象徴されるかの如く、あらゆる宣伝印刷物も、また商品の図案にも、必ず灯台を添えることを忘れないのである。江戸時代の銚子が鯛をもって代表されていたとすれば、明治以降の銚子は燈台によって代表されると云うことが出来よう」(篠崎 1956)と述べられていることから明らかである。実際、フィールド調査の際にも、宣伝印刷物



図表 4-3 観光ガイドマップ『銚子散歩』（筆者撮影）



図表 4-4 銚子ビールのロゴ（筆者撮影）



図表 4-5
銚子100年マスコットキャラクター「超（ちょう）C（しー）ちゃん」（出典：銚子市HP）

や商品のデザインに犬吠埼灯台が描かれているものが見られた（図表 4-3、図表 4-4）。また、銚子のマスコットキャラクターにも犬吠埼灯台がデザインされている（図表 4-5）。さらに、銚子市歌の2番の歌詞には「潮（うしお）花さく磯つづき 観光の美に富めるところ 犬吠埼の灯台は 文化の光世を照らす 銚子、銚子、吾等の銚子」（銚子市）と、犬吠埼灯台が出てきている¹²。これらのことから、犬吠埼灯台が銚子のシンボルとなっているといえる。

また銚子のシンボルである犬吠埼灯台では、様々な行事が行われてきた。その中でも、盛大に行われたのが「還暦犬吠埼灯台祭」である。これは、銚子市によ

ると、1935年6月22日から24日までの3日間、観光銚子の宣伝を目的として、銚子観光協会主催、通信省・銚子市・高神村後援で実施された行事である。第一会場の犬吠埼灯台構内には、記念碑が建てられ、22日に除幕式が行われた。23日には記念式典が開かれ、フランス大使代理が出席し、国内では通信大臣代理以下関係者100人以上、地元関係者2000人が参列した。また、第二会場の公正会館では、燈台と海の展覧会が3日間開催され、第三会場の飯沼観音境内では様々な演芸が催されて、市は燈台祭一色に塗りつぶされたという（銚子市 1983）。その後も、銚子市・銚子商工会議所・銚子観光協会などの主催や協力によ

り、1955年には「犬吠埼灯台80周年記念祭」、1974年には「犬吠埼灯台100周年記念まつり」、1994年には「犬吠埼灯台120年祭」、2014年には「灯台140周年記念式典」が開催されている。これらの行事は、船舶航行の安全を守ることに加え、多くの観光客が訪れる観光地として活躍する犬吠埼灯台の功績を称え、感謝の気持ちを表し、また、観光客誘致を図ることを目的に開催された。

犬吠埼灯台に関する行事として、他には、2019年に「灯台ワールドサミットin銚子」が開催された。

これは、先に述べた三重県志摩市で行われた「灯台ワールドサミット」の2回目として開かれたものである。「灯台の文化的価値を評価し、保全と活用を進め次世代へ引き継ぎ、国際的にも価値ある観光資源としてどのように生かしていくか、その方法や可能性を探り、地域活性化の一助とするための情報・意見交換の場」(灯台ワールドサミットin銚子実行委員会事務局 2019)として、灯台をテーマにしたシンポジウムなどが行われた。

これまで整理してきたように、犬吠埼灯台は、銚子において新文明のトップを切ったものとして、銚子の文明開化の象徴となっている。また、銚子の宣伝印刷

物や商品のデザインに犬吠埼灯台がみられ、銚子市歌の歌詞にも犬吠埼灯台が出てくることから、銚子のシンボルとなっているといえる。加えて、銚子では、船舶航行の安全を守る航路標識として、そして多くの観光客が訪れる観光資源としての犬吠埼灯台の功績を称え、感謝の気持ちを表すことなどを目的とした行事が数回行われている。さらに「灯台ワールドサミットin銚子」が開催されるなど、銚子にとって犬吠埼灯台は、航路標識としても観光資源としても重要な存在なのである。

12 銚子市HP「銚子市の木・花・魚・歌・紋章」(最終閲覧日2020年12月11日)

[http://www.city.choshi.chiba.jp/sisei/about_choshi/profile/symbol.html]

2. 犬吠埼灯台の概要

次に、本研究の対象である犬吠埼灯台の概要について述べる。図表4-6は、犬吠埼灯台に関する出来事をまとめた年表である。この年表を参考にしつつ、犬吠埼灯台の概要について整理していく。

(1) 犬吠埼灯台と霧笛舎の建設

図表 4 - 6 犬吠埼灯台 年表

西暦 (和暦)	出来事
1872 (明治 5) 年 9 月 28 日	犬吠埼灯台着工
1874 (明治 7) 年 11 月 15 日	犬吠埼灯台完工、初点灯
1910 (明治 43) 年	霧信号業務開始
1935 (昭和 10) 年 6 月	還暦灯台祭
1955 (昭和 30) 年 7 月	灯台 80 周年記念祭
1974 (昭和 49) 年 8 月	灯台 100 周年記念祭
1989 (平成 元) 年	灯台参観者数最多、約 25 万人
1994 (平成 6) 年 10 月	灯台 120 周年記念祭
1998 (平成 10) 年	「世界の灯台 100 選」 「日本の灯台 50 選」選出
2002 (平成 14) 年	犬吠埼灯台資料展示館開館
2008 (平成 20) 年	犬吠埼霧信号所廃止
2009 (平成 21) 年 2 月 23 日	「近代化産業遺産」認定
2010 (平成 22) 年	「国の登録有形文化財」登録
2014 (平成 26) 年 11 月	灯台 140 周年記念式典
12 月	旧犬吠埼霧信号所霧笛舎 「国の登録有形文化財」登録
2020 (令和 2) 年 10 月 16 日	「国の重要文化財」指定が答申される

(筆者作成)

犬吠埼灯台は、イギリス人の R・H・ブラントンを設計監督として、明治 5 年 9 月 28 日着工、明治 7 年 11 月 15 日に完工点灯したレンガ造りの灯台である¹³。犬吠埼灯台は、先述の改税約書（江戸条約）で建設が決まった灯台でない。（公社）燈光会によると、犬吠埼灯台の建設は江戸条約に入っていないが、政府は灯台が航海安全のために非常に効果が大いことを認め、条約で取り決めた数に関わらず、外国人と協議の上、灯台の建設が決められた。これによって、横浜・北米航路間の貿易船に必要な箇所として、犬吠埼灯台の建設が決まったという¹³。

また、1910 年には、犬吠埼灯台の側に霧笛舎が建設された。海上保安庁によると、霧笛とは、霧が発生し視界不良となった際に、音で位置を知らせる霧信号であるという（海上保安庁 2019）。犬吠埼灯台がある銚子は、霧が発生しやすい場所である。気象庁銚子地方気象台によると、全国の気象官署における霧の年間観測日数は、3 番目に多くなっているという（気象庁銚子地方気象台 2018）。霧の発生が多い銚子の市民にとって、霧笛の音は「郷愁を感じる音」朝日新聞 2007・11・29・朝刊）や「子守歌」（『読売新聞』2007・9・6・朝刊）として親しまれてきた。

しかし、近年のGPS等の航海計器の発達により、霧笛の必要性が薄れたことで、2008年3月31日に廃止された(海上保安庁 2019)。

このように、犬吠埼灯台は、改税約書における取り決めとは別に建設が決定され、横浜・北米航路間の貿易船に必要な灯台として建設された。また霧笛舎は、1910年に建設され、霧笛の音は銚子の市民に親しまれてきた。しかし、霧笛の必要性が低下したことから、2008年に廃止された。一方で、犬吠埼灯台は現在もその機能を果たしている。



図表4-7
犬吠埼灯台(筆者撮影)



図表4-8
旧犬吠埼霧信号所霧笛舎(筆者撮影)

13 (公社)燈光会HP「のぼれる灯台 犬吠埼灯台(千葉

県銚子市)」

(最終閲覧日2020年8月27日) [https://www.tokokai.org/tourlight/tourlight03/]

(2) 犬吠埼灯台と旧霧笛舎の価値評価

現在、現役の犬吠埼灯台と廃止された旧霧笛舎は、様々な視点からそれらの価値が評価されている。例えば、犬吠埼灯台は、明治期灯台A B C Dランクのうち、Aランクとして判定されている。これは、藤岡によると、明治期灯台の保全整備にあたって、海上保安庁灯台部の委託により発足した灯台施設調査委員会が、1985年から1987年にかけて行った詳細な調査により分類したものであるという。それぞれの灯台について、①歴史・文化的な視点、②土木・建築史的な視点、③生活文化的な視点から調査を行い、判定されている(藤岡 2015)。また、Aランクの灯台は、「特に貴重な施設であり、改修にあたっては専門委員会に図り改修方法を検討する」とされている(海上保安庁 2019)。犬吠埼灯台は、様々な視点から行われた調査において、最高ランクの評価がされている。また犬吠埼灯台は、1998年に「日本の灯台50選」と「世界の灯台100選」に選ばれている。「日本の

灯台50選」は、第50回灯台記念日である1998年11月1日を記念して、海上保安庁と(公社)燈光会が印象に残った灯台を一般公募し選ばれた灯台のことである。「世界の灯台100選」は、IALA(国際航路標識委員会)が「世界各国の歴史的に重要な灯台100」として選んだ灯台のことであるという(藤岡 2015)。日本において、印象に残る灯台とされているだけでなく、歴史的に重要な灯台の日本代表として評価されている。

また、先述の通り2008年には、経済産業省によって「近代化産業遺産」に認定された。経済産業省が公表した「近代化産業遺産群 続33」において、「安全な船舶交通に貢献し我が国の海運業等を支えた燈台等建設の歩みを物語る近代化産業遺産群」の1つとして、犬吠埼灯台が選ばれている。犬吠埼灯台の建築構造は、灯塔の内側の壁の外側にも一重の壁を造って構造的な補強を行う二重殻壁である。地震が多発する日本の特性を踏まえて、耐震を意識した構造がとられ、地震で倒壊することなく現在もその役割をはたしている。この建築構造に見いだされる技術的な先駆性が評価された(経済産業省 2008)。

さらに、2010年4月には国の「有形文化財」に

登録されている。「登録有形文化財」とは、近年の国土開発や生活様式の変化などによって、社会的評価を受けるまもなく消滅する危機に直面している文化財建造物を後世に継承していくために作られた「文化財登録制度」によって登録された、保存や活用についての措置が必要とされる文化財建造物であるという¹⁴。また、2014年12月には、旧霧笛舎も「国の有形文化財」の認定を受けた。文化庁は、八幡製鉄所製とみられる鋼板を主建材として全体が構成された鉄造建築で、ヴォールト状(かまぼこ型)の屋根とその上に突き出た霧笛が特徴的であるとし、明治期の日本の灯台に特有の鉄造を採用した霧信号所として、唯一現存し、日本の近代化を象徴する貴重な遺構であると評価している¹⁵。

さらに2020年10月には、国の「重要文化財」として指定されることになった。文化庁によると、文化審議會は2020年10月16日、犬吠埼灯台を「北太平洋航路へ最初に光を投げた明治初期の煉瓦造灯台」として、国の重要文化財に指定することを文部科学大臣に答申したという。犬吠埼灯台とともに旧霧笛舎、旧倉庫も重要文化財の対象となり、六連島灯台、角島灯台、部埼灯台とあわせて、海上保安庁が管理する現役

の灯台として初めて重要文化財に指定された。指定基準の1つ目は、北太平洋航路のための最初の灯台として歴史的価値が高いことである。2つ目は、地震の多い日本に建設された初期の煉瓦造塔状構造物として、二重壁構造という先駆的な技術が使われており、技術的に優秀なものであることだという（文化庁 2020）。

このように、犬吠埼灯台と旧霧笛舎は、その価値が様々な視点から評価されている。灯台の保全整備のための評価や一般公募による評価などに加え、「近代化産業遺産」や「登録有形文化財」などの文化遺産や文化財としての価値が評価されているのである。

14 文化庁HP「有形文化財（建造物）」（最終閲覧日2020年12月5日）

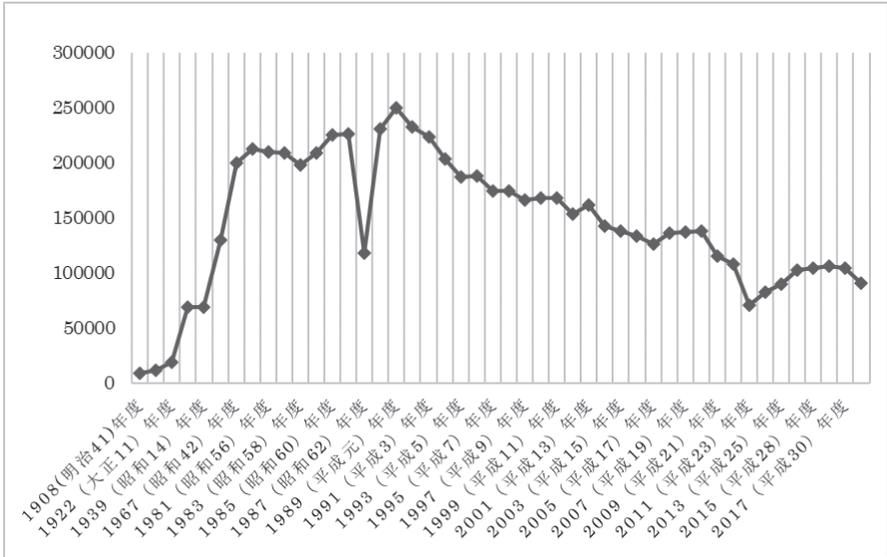
[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/yukei_kenzobutsu/]

15 文化庁HP「国指定文化財等データベース」（最終閲覧日2020年12月5日）

[<https://kunishitei.bunka.go.jp/heritage/detail/101/00010267>]

(3) 犬吠埼灯台と観光

次に、犬吠埼灯台と観光の関わりについて述べていく。犬吠埼灯台には、建設当時から多くの見学者が訪れていた。銚子市によると、建設当時から毎日のように150〜200人ほどの見物人が各地から訪れていたと伝えられているという¹⁶。全国の参観灯台の中でも犬吠埼灯台は、多くの参観者が訪れる灯台である。参観者数の推移は、図表4-9の通りである。参観者数は、1989年度の約25万人をピークに減少傾向となっている。また1987年度と2011年度の参観者数は、大幅に減少している。1987年は、灯台改修工事に伴って長期間参観が休止された時期であり、また2011年は、東日本大震災が起きた時期である。これらのことが要因となって、参観者数が大幅に減少しているのである。参観者は減少傾向にある一方で、全国の参観灯台のうち犬吠埼灯台の年間参観者数は、ほとんどの年度で第1位となっている。銚子の観光客数の推移（図表4-2）と比較してみると、犬吠埼灯台の参観者数と銚子の観光客数は、どちらも1989年までは増加傾向にあった。しかし、それ以降、犬吠埼灯台の参観者数は減少傾向となっており、2011年の東日本大震災によって大きく減少するも徐々に増加し、その後は減少している。一方で、銚子の観光客



図表 4-9 犬吠埼灯台参観者数の推移

※参観者数は2007年12月までは大人と小人、2008年1月以降は大人のみを計上。

(出典：『犬吠埼灯台関係内外資料集』、『燈光 5・7月号』を基に筆者作成)

多くの写真や実物を用いた展示方法によ

が展示されている。犬吠埼灯台のレンズと同等の大型一等レンズ(図表4-11)が展示されている。



図表 4-10

犬吠埼灯台建設時に使用されたレンガ(筆者撮影)

数は、横ばいから増減を繰り返し、同じく震災により大きく減少したが、その後は増加傾向にある。犬吠埼灯台の構内には、犬吠埼灯台資料展示館が建設されている。これは、先述の通り、(公社)燈光会によって、航路標識の周知広報事業の一環として整備されたものである。犬吠埼灯台資料展示館は、灯台を見学した人々に映像や写真等で解りやすく航路標識を紹介し、航路標識への理解をより深め、さらに海への思いを強めてもらうことを願い、2001年度に全国で5番目の資料館として開設されたものであるという¹⁷⁾。館内では、犬吠埼灯台がある銚子市や灯台とその他の航路標識について紹介されており、また、犬吠埼灯台の建設時に使用されたレンガ(図表4-10)や、



図表4-11
一等レンズ（筆者撮影）

り、犬吠埼灯台に訪れた観光客が、分かりやすく犬吠埼灯台や航路標識について、学ぶことができる施設である。

これまで、犬吠埼灯台と観光の関わりについて整理してきた。犬吠埼灯台には、建設された当時から多くの見学者が訪れていた。その年間参観者数は1989年以降減少傾向にあるものの、全国の参観灯台の中ではほとんどの年度で第1位となっている。また、犬吠埼灯台の構内には、灯台資料展示館が併設されている。多くの写真や実物を用いた展示により、観光客が犬吠埼灯台や航路標識などについて知り、学ぶことができる施設となっている。

16 銚子市HP「銚子市の歴史」(最終閲覧日2020年12月

5日) [https://www.city.choshi.chiba.jp/sisei/about_choshi/profile/techi.html]

17 (公社)燈光会「犬吠埼灯台」(パンフレット)

第5章 犬吠埼灯台をめぐるまなざしの変遷

1. 新聞記事の内容分析

これまで、産業遺産概念の整理をしたうえで、灯台の概要や銚子と犬吠埼灯台の概要について述べてきた。本章では、それらの概要を踏まえ、新聞記事の記述内容の分析から、犬吠埼灯台をめぐるまなざしの変遷について考察していく。

分析の方法としては、「ヨミダス歴史館」(読売新聞)と「聞蔵Ⅱビジュアル」(朝日新聞)の2つの新聞記事のデータベースを用いて、キーワード「犬吠埼灯台」を含む記事の記述内容を分析した。それぞれのデータベースで、キーワード「犬吠埼灯台」を含む記事について検索した結果、記事数は「ヨミダス歴史館」で253件、「聞蔵Ⅱビジュアル」で325件抽出された。それらの記事の記述内容から類似したものをグループ化し、「灯台としての機能・技術」、「観光地としての灯台」、「文化遺産・文化財としての灯台」、「灯台の保存活動」、そして「その他」の5項目に分類した。ま

た「その他」には、他の4項目に当てはまらない、犬吠埼灯台周辺で起きた海難事故や事件などの記述を分類した。

次に、記事数を勘案しつつ、現在から20年ごとに「1期…1874年（建設時）から1960年まで」、「2期…1960年から1980年まで」、「3期…1980年から2000年まで」、「4期…2000年から2020年現在まで」と4つの時代に区切ることで、各時代の記事内容の特徴を明確化した。その結果、1期は「灯台としての機能・技術」の記述が多く、2期では「観光地としての灯台」の記述がみられるようになり、3期は「文化遺産・文化財としての灯台」と「灯台の保存活動」の記述がみられ始め、4期ではそれらの記述が増加しているというような特徴が明らかになった。1期から4期それぞれの新聞記事総数と項目ごとの記事件数は、図表5-1の通りである。

全体として「灯台としての機能・技術」に関する記述は、時代を経るにつれて減少傾向にあり、「観光地としての灯台」に関する記述は、常に多数みられる。また、「文化遺産・文化財としての灯台」、「灯台の保存活動」に関する記述は、3期以降増加傾向にある。次節では、4期それぞれの記述内容をまとめた巻末の

図表5-1 新聞記事の総数と項目毎の記事件数

	1期 (~1960)	2期 (1960~1980)	3期 (1980~2000)	4期 (2000~2020)
新聞記事総数	53	24	137	364
その他を抜いた総数	18	11	54	197
灯台としての 機能・技術	18 (100%)	4 (36%)	10 (19%)	17 (9%)
観光地としての灯台	0	7 (64%)	36 (67%)	127 (64%)
文化遺産・文化財 としての灯台	0	0	2 (4%)	22 (11%)
灯台の保存活動	0	0	6 (11%)	31 (16%)

※カッコ内の数値はその他を抜いた記事総数に占める割合

(筆者作成)

資料を参考にしつつ、詳しい記述内容の分析結果について述べていく。

2. 犬吠埼灯台をめぐる記事内容の変遷

(1) 1期（1874年から1960年まで）…技術礼賛期

1期では、犬吠埼灯台の「灯台としての機能・技術」に関する記述が多くみられる。例えば、「犬吠埼の燈臺の遙かに光明を放て海面を照らし…」（『朝日新聞』1893・4・6・朝刊）というような、夜の海を照らす機能に関する記述や、「銚子港一帯に珍しい濃霧襲来犬吠岬燈台では警笛を吹き鳴らして洋上の警戒に努めて居るが…」（『朝日新聞』1929・12・18・夕刊）といった、霧笛の機能に関する記述がみられた。また、「黒潮煙る太平洋の羅針盤、『夜の太陽』として輝かしい歴史を持つ銚子犬吠岬燈台は…」（『朝日新聞』1935・6・17・夕刊）、「燈臺は海の守り神です、闇に閉ざされた海をゆく航海者の唯一の目標なのです」というような、機能について様々な比喻表現を用いた記述もみられた。さらに、「脚下に碎ける怒涛の最頭にそ、り高つ高さ百四尺、白亜の尖頭は幾度か暴風の洗禮を受けたが倒れもせず、焼けもせず、明治五年初めて日

本に輸入された西欧文明そのまゝの姿で今還暦を迎えたのだ」（『朝日新聞』1935・6・17・夕刊）というような、西洋文明を取り入れて建設された犬吠埼灯台の丈夫さ、立派な技術についての記述もみられた。

他にも、灯台を管理する職員である灯台守について述べられたのがみられ、「燈臺員は、年百年中不眠不休であつて、日曜もなければ、正月もない、勿論晝夜の別もなく勤務して居るのである」、「燈臺員といふものは其任務執行中は天災地異其他如何なる事故が生じても、一寸も其位置を去ることが出来ないといふ程の神聖のものでありますから…」（『朝日新聞』1910・1・12・朝刊）というような、灯台守の業務の過酷さについて記述されていた。また、「燈臺院なるもの、任務に對して、非常の尊敬と同情の年とを拂ふたと同時に、徹頭徹尾其職分に甘んじて専心一意忠實を期するといふ人の人格に感服したのである」（『朝日新聞』1910・1・13・朝刊）といった、灯台守への尊敬の気持ちについての記述もみられた。

このように、1期では「灯台としての機能・技術」に関する記述が多くみられた。夜の海を照らす機能やそれについて比喻表現を用いた「海の守り神」「夜の太陽」といった記述、そして、霧笛の機能についての

記述もみられた。また、西洋文明を取り入れて建設された犬吠埼灯台の技術に関する記述や、灯台の機能や技術を支えた灯台守についても述べられていた。これらのことから、1874年から1960年までは、犬吠埼灯台の灯台としての機能や技術にまなざしが向けられているといえる。その背景としては、次の2つのことが考えられる。1つ目は、第3章で述べた通り、1870年以降、日本において灯台の重要性が認識されたことや海運が発展したことにより、灯台の建設が活発化したことである。2つ目は、第4章で述べた通り、建設当時の犬吠埼灯台が、銚子の文明開化の象徴のような存在であったことである。これらのことが背景となって、船舶航行の安全を守るという重要な機能や、西洋文明を取り入れて建設された犬吠埼灯台の技術にまなざしが向けられたと考えられる。よって、この時代は技術礼賛期とまとめることができる。

(2) 2期（1960年から1980年まで）…観光施設化期

1期では、「灯台としての機能・技術」に関する記述が多かった。一方で、2期においては、「観光地としての灯台」に関する記述がみられるようになったこ

とが特徴としてあげられる。「太平洋を航行する船舶の守り神」、犬吠埼灯台は、また観光のシンボルでもある」（『読売新聞』1972・4・14・朝刊）というような、犬吠埼灯台の機能や技術に加えて、観光資源として紹介されている記事は、「観光地としての灯台」の項目に含めているが、「観光地としての灯台」に関する記述（7件）は、「灯台としての機能・技術」に関する記述（4件）より多かった。

「観光地としての灯台」に関する記述内容をみてみると、「犬吠埼灯台を選んだ。ここには一日七、八百人から多い日には千四、五百人の観光客が訪れる」（『読売新聞』1970・2・14・朝刊）、「犬吠埼灯台は、四か月ぶりに見学を再開して初の日曜日とあって、子供たちなど約二千人が登り、大入り満員」（『読売新聞』1973・3・5・朝刊）というような、犬吠埼灯台に多くの観光客が訪れていることが述べられている。また、「銚子観光のシンボル犬吠埼灯台は…」（『読売新聞』1973・1・11・朝刊）、「観光銚子のシンボルになっている犬吠埼灯台が…」（『読売新聞』1973・11・15・朝刊）といった、銚子の観光のシンボルとして紹介されている記述もみられた。さらには、犬吠埼灯台の展望台からの景色についての記述もみられ、例とし

ては「地上三十一段、海面上五十二層の高い展望台から青い水平線をながめ、雄大な自然を満喫していた」(『読売新聞』1973・3・5・朝刊)、「燈台の展望台(入場料50円)へのぼるらせん階段。数えたら全部で九十八段あった。海からの高さは五十二段。太平洋が一気に開けた」(『読売新聞』1980・3・20・朝刊)といったものがある。

「灯台としての機能・技術」に関する記述には、「濃霧から航行船舶を守る霧信号所(明治四十三年)無線電信、レーダーの発達で無線方位信号所(昭和七年)も併設され、電波によって位置を知らせたり、テレマーカー・ビーコンを出したり、気象状況まで知らせている」(『読売新聞』1966・6・10・朝刊)といったものがあり、時代を経るにつれて発達した機能や技術について記述されていた。

このように、2期では、犬吠埼灯台の機能や技術について記述される一方で、賑わう観光地や銚子市の観光のシンボルとしても紹介されており、「観光地としての灯台」に関する記述がみられるようになっていく。これには、マス・ツーリズムが誕生し、観光が大衆化されたという社会的背景が関係しているといえる。1960年代において、第二次世界大戦後に経済復興し、

1950年代後半から高度経済成長を遂げた日本では、可処分所得の増大などによって観光が大衆化した(安村 2011)。それにより、「観光地としての灯台」の記述が増加していると考えられる。よって、この時代は、犬吠埼灯台に観光地としてのまなざしが向けられており、観光施設化期とまとめることができる。

また、2期においてはまなざしの方向性に変化がみられる。1期では、夜の海を照らす姿や西洋の技術を用いて建てられた立派な姿が注目されていたことから、灯台へのまなざしが優勢であった。一方で、2期において、犬吠埼灯台が観光地として記述される際には、その展望台からの眺めについての記述がみられる。このことから、この時代は灯台からのまなざしが優勢となっており、まなざしの方向性が変化したと考えられる。

(3) 3期(1980年から2000年まで)・・・技術再評価期

2期では、「観光地としての灯台」に関する記述がみられるようになったことが特徴としてあげられた。3期においても、「観光地としての灯台」に関する記述はみられる。2期と同じように「観光灯台として訪

れる人も多く……」（『読売新聞』1986・9・10・朝刊）、
「犬吠埼灯台には年間22、3万人もの観光客が訪れる。
銚子の貴重な「観光資源」でもある」（『朝日新聞』1
989・5・24・朝刊）というような人気観光資源と
しての記述がみられる。また、「銚子観光のシンボル
」（『読売新聞』1989・7・19・朝刊）、「銚子市の観光
名所・犬吠埼灯台周辺に」（『朝日新聞』1988・9・
17・朝刊）といった、銚子の観光のシンボル、観光名
所としての記述もあった。加えて、「99段のらせん階
段をのぼると、広大な太平洋の海原と白砂青松の海岸
線が眼下に見下ろせる」（『朝日新聞』1990・11・
9・朝刊）、「高さ二十七メートルの灯火近くから見る
パノラマは絶景」（『読売新聞』1997・2・13・夕刊）
というような灯台からの眺めについての記述もみられ
た。一方で、「ライトアップされた犬吠埼灯台が眺め
られる」（『朝日新聞』1990・7・13・朝刊）、「終点
間近には高さ27メートルの犬吠埼灯台の雄姿」（『読売
新聞』1990・10・25・夕刊）といった、灯台への眺
めについての記述も一部でみられた。また、「関東最
東端の犬吠埼灯台や近くの愛宕山から見る初日の出
は、午前6時46分ごろと関東では最も早く、迫力満点」
（『読売新聞』1986・12・24・夕刊）、「表には犬吠埼

灯台の初日の出の写真、裏には「二〇〇〇年を迎える
瞬間に、銚子にいたことを証明します」と記されてい
る」（『朝日新聞』1999・12・12・朝刊）というよう
な初日の出のスポットとしての記述がみられた。

3期の記述内容において特徴的なのは、「文化遺産・
文化財としての灯台」や「灯台の保存活動」に関する
記述がみられるようになったことである。例えば、海
上保安庁が犬吠埼灯台を含む明治時代に建てられた全
国各地の灯台の永久保存を決め、壊れた所の補修や塗
装工事等を行うことについて述べた記事においては、
「潮風にさらされて老朽化した施設が、1世紀にわた
る海の歴史を伝える文化財としてよみがえる」（『朝日
新聞』1990・5・30・夕刊）といった記述がみられた。
また、この永久保存に関して調査を行った村松貞次
郎・東大名誉教授の話が取り上げられており、「明治
初期に外国人が日本のへき地に入って灯台を造ったこ
とは、日本が国際国家の仲間入りをする糸口となった。
日本が西洋の文化を受け入れたことを示す施設で、い
わば日本近代化の生き証人です」「灯台と付属施設を
文化財として後世に伝えていくことは大切なことで
す」（『朝日新聞』1990・5・30・夕刊）と記述され
ていた。これらの記述内容からは、灯台が近代の生き

ている遺産や文化財として捉えられており、それらを保存し後世に伝えていくことが重要であることが述べられている。他にも、「機能的に優れたうえに、端正、

優美な姿を誇る明治の灯台。それは、文化財としても文句なしの一級品と言える。だが、慶応義塾三田演説館（東京・明治八年）、大浦天主堂（長崎・同）、旧開智学校校舎（長野・同九年）など同年代の明治の洋風建築が国の重要文化財に指定されているなかで、同種の扱いを受けている灯台は一基もない。わずかに、神子元島灯台だけが国の史跡に指定されているに過ぎない」（『読売新聞』1987・7・6・夕刊）というような、灯台の文化財としての価値が評価されていないことについての記述がみられた。さらに、海上保安庁灯台部工務課の築貫義人課長の語りとして「明治の灯台は現在に生きて機能しているもので、海上交通の安全を確保することを第一義的に考えなくてはなりません。ただ、一方では文化財として国民の財産でもあるので、その点も考慮して程度に応じて補修、整備はしていくつもりです」（『読売新聞』1987・7・6・夕刊）といった記述もみられ、灯台の本来の機能を重視しつつ、文化財としても考慮した補修や整備を行うとされている。加えて、巻末の資料③「灯台の保存活動」に関する

記述の欄にみられるように、1999年5月に設立された市民団体「犬吠埼ブランドン会」の活動についての記述がみられた。

「灯台としての機能・技術」に関する記述は、2期では、時代を経るにつれて発達した機能や技術についての記述がみられた。一方、3期においては、「明治維新以来、急ピッチで世界有数の海運国に、そして世界最大の水産国にと日本が成長した陰には、航行の安全を守る灯台を始めとする航路標識の整備が欠かせなかった」というような、建設当時の灯台の機能を再評価した記述や、「建設用材もレンガ、石、鉄、コンクリートとさまざままで、構造もその時代、時代の最先端の技術が取り入れられているため、古い灯台には文化的な価値の高い貴重なものが多い」（『読売新聞』1988・10・26・夕刊）といった、灯台の文化的価値を評価する記述がみられる。加えて、「灯台（航路標識）そのものも、光、音から電波、衛星利用へと多様化を続けている。しかし、暗夜の海に一筋の灯光を見つけた時の船乗りの安心感は昔も今も、そして将来も変わらないに違いない」（『読売新聞』1988・10・26・夕刊）というような、航海計器が発達していく中での灯台の永続性についての記述もみられた。

「その他」の記述内容としては、「銚子市末広町の県道交差点に同市のシンボル犬吠埼灯台を：」（『朝日新聞』1988・9・21・朝刊）といった、銚子市のシンボルとしての記述がみられた。さらに、「波崎町生まれだが、朝もやを通して響く犬吠埼灯台の霧笛を聞いて育ち、中、高校時代は、利根川の渡し船に自転車積んで、銚子の町へ買い物や遊びに通った。大学や教職時代も再三、地質調査に訪れ、銚子にはふるさと同然の思い入れがあるという」（『朝日新聞』1996・3・11・朝刊）、「ボウー」。犬吠埼灯台の霧笛の音。静かな真夜中、市街地にも流れてくる。一昨年の改修でも、昔のままの機械を特注して残したというレトロの音だ」（『朝日新聞』1990・12・24・朝刊）といった、犬吠埼灯台に併設されている霧笛の音に対して、懐かしさを感じているという記述もみられた。

ここまで、3期の記述内容を見てきたが、最も特徴的なのは「文化遺産・文化財としての灯台」「灯台の保存活動」に関する記述がみられるようになったことである。文化財として保存していくべきであるといった記述や、市民による保存活動に関する記述から、犬吠埼灯台が文化財としてのまなざしを向けられ始めていると考えられる。この時代は、第2章で述べたよう

に、産業遺産や近代化遺産といった概念が日本で用いられ始め、社会的に広く認知されるようになった時代であり、市民レベルでの保存運動等が行われた時代である。また、1996年には文化庁によって「文化財登録制度」が導入されるなど、社会的にも文化財への価値を評価する動きが高まっていた。これらのことが背景となつて、犬吠埼灯台は、文化遺産や文化財としてのまなざしが向けられ始めたといえる。

また、「灯台としての機能・技術」に関する記述では、建設当時の灯台の機能を再評価した記述、灯台の文化的価値を評価する記述、灯台の永続性に関する記述がみられた。文化財としてのまなざしが向けられ始めたことで、灯台の機能や技術が再評価され、文化的価値についての記述がみられるようになったと考えられる。一方で、この時代は、GPS等の航海計器が発達し、灯台の役割が低下しつつあった時代でもある。そのような状況の中で、灯台の機能や技術が注目され、再評価されたともいえる。これらのことから、この時代は、犬吠埼灯台の機能や技術に再びまなざしが向けられており、技術再評価期とまとめることができる。

まなざしの方向性について考えてみると、この時代には、「観光地としての灯台」に関する記述において、

灯台からの眺めだけでなく、灯台への眺めについての記述がみられた。また、犬吠埼灯台の機能や技術に再びまなざしが向けられていることから、灯台からのまなざしに加えて、灯台へのまなざしも共存しているといえる。

(4) 4期（2000年から2020年まで）…文化遺産
産化期

3期における記述内容の特徴として、「文化遺産・文化財としての灯台」「灯台の保存活動」に関する記述がみられるようになったことをあげた。4期では、それらに関する記述がより多くみられるようになってきている。

「文化遺産・文化財としての灯台」に関する記述では、「江戸時代末期から第二次世界大戦終了時にかけて、本県の近代化を進めてきた貴重な産業・交通遺跡など」（『読売新聞』2000・8・6・朝刊）、「千葉県近代化に関係の深い建造物」「航海の安全を支えた犬吠埼灯台といった、明治から昭和にかけて産業・交通の発展に貢献した佐原、銚子市内の建物」（『読売新聞』2000・9・5・夕刊）というように、犬吠埼灯台が千葉県の近代化に貢献した遺産として記述されて

いるのがみられた。加えて、『読売新聞』の講評連載である「近代化遺産ろまん紀行」において、犬吠埼灯台が紹介されており、犬吠埼灯台の西洋から導入された建築技術についての記述がみられた（『読売新聞』2002・3・10・朝刊）。犬吠埼灯台は、2008年に「近代化産業遺産」に認定されているが、それ以前から、近代化の遺産として捉えられていたと考えられる。

また、2008年度の「近代化産業遺産」への認定、2010年（犬吠埼灯台）と2014年（旧霧信号所霧笛舎）の「国の有形文化財」への登録、2020年の「国の重要文化財」指定の答申に関する記事では、それぞれ評価された機能や技術についての記述がみられた（資料④）。さらに、「犬吠埼灯台は全国でも比較的交通の便がよく訪れやすい灯台として、長く銚子観光の中心にあった。国の重要文化財という「格」を得ることで、観光復興のシンボルとしての期待が高まる」（『朝日新聞』2020・10・18・朝刊）といった、国による評価によって観光への期待が高まるといった記述もあった。

「灯台の保存活動」に関する記述については、1999年5月に設立された市民団体「犬吠埼プラントン会」が行う様々な活動についての記述がみられる。さ

らに、犬吠埼灯台の価値の再認識や、霧笛舎を近代化遺産や文化財、観光資源として保存・活用していきたいというような、犬吠埼灯台の保存・活用に関する活動についての思いも記述されていた。また、霧笛舎の廃止に対して、「市と市観光協会、市漁協、商工会議所の代表がこのほど海保を訪れ、国土交通省と第3管区海上保安本部長にあてて、施設保存と市民や観光客への一般公開を求める要望書を提出した」（『朝日新聞』2007・10・19・朝刊）という記述や、「歴史や文化的な価値のある灯台が立つ4市が集い、観光振興の施策などを話し合う「灯台ワールドサミット」が、銚子市で開かれた。『灯台のもつ歴史的、文化的価値を再評価し、次世代に引き継ぐ活動を進める』などとする共同宣言を読み上げた」（『読売新聞』2019・11・15朝刊）というような記述がみられ、銚子市による犬吠埼灯台の保存活動に関する記述もあった。加えて、「安全な航行のためには一定数の灯台は必要で、管理する海上保安庁では、観光面での魅力を発信し、その存在意義を広く訴えていく方針だ」（『読売新聞』2019・4・18・夕刊）という、海上保安庁による灯台の保存活動に関する記述もみられた。

「灯台としての機能・技術」に関する記述について

みてみると、「自分の位置がわかるGPSが発達した今、灯台の役割とは？ 機械は万能ではない。最後に頼れるのはやはり一筋の光明かもしれない」（『朝日新聞』2014・11・14・朝刊）、「外洋から東京湾に入る船にとっては、初めて確認する日本の陸の光にもなる。この一筋の光に、何カ月も外洋を航海してきた船乗りたちは、特別な安らぎをおぼえるのだという。灯台は歴史の中に立つ。初点灯は1874（明治7）年11月15日。以来130年余り、近代日本の歩みを見守ってきた」（『朝日新聞』2008・8・19・夕刊）というような、GPSの発達によって、灯台の必要性が低下している中での、灯台の機能についての記述がみられた。

「観光地としての灯台」に関する記述内容をみてみると、3期と比べてそれほど変化はみられない。犬吠埼灯台が人気の観光地として、銚子の観光名所として、また初日の出スポットとして記述されており、また、灯台からの眺めについても記述されている。一方で、灯台への眺めについての記述が増えている。「眼下に太平洋が迫る露天風呂。遠くには犬吠埼灯台」（『朝日新聞』2005・1・20・朝刊）、「眼下に広がる太平洋や犬吠埼灯台を眺めながらの露天風呂などが売りの『グランドホテル磯屋』（『朝日新聞』2012・4・

18「朝刊」というような、ホテルからの犬吠埼灯台への眺めの外、「こいのぼりが飾り付けられた白い灯台をバックに記念撮影する家族連れなどがみられた」（『朝日新聞』2005・5・2「朝刊」）、「灯台上部から3方向にロープを垂らして、イルミネーションをあしらう」（『朝日新聞』2007・12・23「朝刊」といった、デコレーションされた灯台への眺めについての記述がみられた。

「その他」の記述内容には、1980年から2000年までと同じように、犬吠埼灯台を銚子のシンボルとして記述したものや、霧笛の音に対して親しみや懐かしさを感じるといった記述もみられた。

4期においては、「文化遺産・文化財としての灯台」や「灯台の保存活動」に関する記述が多くみられるようになった。この背景としては、第2章で述べたように、2000年代後半から産業遺産への社会的な関心が高まっていることや、経済産業省や文化庁によって「近代化産業遺産」認定や「国の重要文化財」指定が行われたことがあげられる。これらのことから、犬吠埼灯台は文化遺産や文化財としてのまなざしを向けられており、この時代は文化遺産化期とまとめることができる。

また、「灯台としての機能・技術」に関する記述では、灯台の機能を再認識した記述がみられた。3期と同様にGPS等の航海計器が発達し、灯台の役割が低下している時代の中で、灯台の機能が再認識されたといえる。

まなざしの方向性について考えてみると、この時代の「観光地としての灯台」に関する記述では、灯台からの眺めに加えて、灯台への眺めについての記述が多くみられる。また、文化遺産や文化財としてのまなざしが向けられていることから、灯台へのまなざしが優勢であるといえる。

3. 犬吠埼灯台をめぐるまなざしの変遷

これまで、キーワード「犬吠埼灯台」を含む新聞記事の記述内容を分析してきた。分析結果をもとに、犬吠埼灯台をめぐるまなざしの変遷についてまとめたものが、図表5―2である。本節では、これを参考にしつつ、記述内容の分析とそれぞれの時期の灯台や観光をめぐる動向、より広い社会的背景を相互に参照しながら、犬吠埼灯台をめぐるまなざしの変遷について考察していく。

(1) 技術礼賛から文化遺産へ

図表5-2 犬吠埼灯台をめぐるまなざしの変遷

	1期 (1874-1960)	2期 (1960-1980)	3期 (1980-2000)	4期 (2000-2020)
時代区分	技術礼賛期	観光施設化期	技術再評価期	文化遺産化期
まなざしの方向性	灯台へのまなざし	灯台からのまなざし	灯台へ／からのまなざし	灯台へのまなざし
まなざしの時間軸	未来	未来／現在	現在／過去	過去

(筆者作成)

まず、1期から4期それぞれ別のまなざしの対象とその社会的背景について述べていく。1期（1874年から1960年まで）においては、「灯台としての機能・技術」に関する記述が多くみられた。その内容は「黒潮煙る太平洋の羅針盤、『夜の太陽』として輝かしい歴史を持つ銚子犬吠岬燈台は：」（『朝日新聞』1935・6・17夕刊）、「脚下に碎ける怒濤の最頭にそり高つ高さ百四尺、白亜の尖頭は幾度か暴風の洗禮を受けたが倒れもせず、焼けもせず、明治五年初めて日本に輸入された西欧文明そのまゝの姿で今還暦を迎えたの

だ」（『朝日新聞』1935・6・17夕刊）というような、灯台としての機能や技術を称賛するようなものであった。1870年以降の日本において、灯台の重要性の認識や海運の発展により灯台の建設が活発化したことや、犬吠埼灯台が銚子の文明開化の象徴であったことを背景に、1期では、船舶航行の安全を守る灯台としての機能や西洋文明を取り入れて建設された技術にまなざしが向けられていたと考えられる。また、それらが称賛されていたことから、この時代は技術礼賛期であったといえる。

2期（1960年から1980年まで）においては、「灯台としての機能・技術」に関する記述もみられる一方で、「観光地としての灯台」に関する記述が多くみられた。そこには「犬吠埼灯台は、四か月ぶりに見学を再開して初の日曜日とあって、子供たちなど約二千人が登り、大入り満員」（『読売新聞』1973・3・5朝刊）、「銚子観光のシンボル犬吠埼灯台は：」（『読売新聞』1973・11朝刊）というように、犬吠埼灯台が賑わう観光地として、また銚子の観光のシンボルとして記述されていた。1960年代、可処分所得の増大などによる観光の大衆化によって、社会的に観光が普及したことを背景に、2期では犬吠埼灯

台に観光地としてのまなざしが向けられていたと考えられる。よって、この時代は、観光施設化期であったといえる。

3期（1980年から2000年まで）においては、「文化遺産・文化財としての灯台」、「灯台の保存活動」に関する記述がみられるようになった。この背景として、産業遺産や近代化遺産といった概念が社会的に広く認知されるようになったことや、文化庁が「文化財登録制度」を導入し、社会的に文化財の価値評価の動きが高まったことがあげられる。このことから、犬吠埼灯台に文化遺産や文化財としてのまなざしが向けられ始めているといえる。また、「灯台としての機能・技術」に関する記述では、建設当時の灯台の機能を再評価した記述がみられた。文化財としてのまなざしが向けられたことや、GPS等の航海計器の発達により灯台の役割が低下していることを背景に、灯台としての機能や技術が再評価されているといえる。3期では、犬吠埼灯台の機能や技術に再びまなざしが向けられており、技術再評価期とまとめることができる。

4期（2000年から2020年まで）においては、「文化遺産・文化財としての灯台」、「灯台の保存活動」に関する記事が増加している。第2章で述べたように、

2000年代後半以降、産業遺産への社会的な関心は高まっている。また、犬吠埼灯台は、経済産業省による「近代化産業遺産」認定（2009年）や、文化庁による「国の有形文化財」への登録（2010年）と「国の重要文化財」指定の答申（2020年）が行われた。さらに、1999年に設立された市民団体「犬吠埼プラントン会」などによって、犬吠埼灯台の保存や活用に関する活動が行われた。このような背景のもと、4期では、犬吠埼灯台に文化遺産や文化財としてのまなざしが向けられていると考えられる。よって、この時代は文化遺産化期であるといえる。

このように、犬吠埼灯台をめぐるまなざしの対象は、様々な社会的背景のもとで変化している。1期は、灯台としての機能や技術にまなざしが向けられ、それらが称賛される技術礼賛の時代であった。2期は、観光地としてのまなざしが向けられるようになり、犬吠埼灯台が観光施設化した時代である。3期は、灯台としての機能や技術が再評価され、それらに再びまなざしが向けられた、技術再評価の時代であった。そして4期は、文化遺産や文化財としてのまなざしが向けられ、犬吠埼灯台が文化遺産化した時代であるといえる。

(2) 灯台へのまなざしと灯台からのまなざし

次に、まなざしの方向性について述べる。1期では、灯台としての機能や技術にまなざしが向けられており、灯台へのまなざしが優勢であった。しかし、2期においては、観光地としてのまなざしが向けられるようになり、「燈台の展望台（入場料50円）へのぼるらせん階段。数えたら全部で九十八段あった。海からの高さは五十二段。太平洋が一気に開けた」（『読売新聞』1980・3・20・朝刊）というような、犬吠埼灯台の展望台からの眺めについての記述がみられるようになった。このことから、2期では、灯台からのまなざしが優勢になったと考えられる。

3期においては、文化遺産や文化財としてのまなざしが向けられ始めるとともに、灯台としての機能や技術に再びまなざしが向けられるようになった。また、「観光地としての灯台」に関する記述では、「ライトアップされた犬吠埼灯台が眺められる」（『朝日新聞』1990・7・13・朝刊）といった、灯台への眺めについての記述が一部みられたが、2期と同じような犬吠埼灯台の展望台からの眺めについての記述もみられた。これらのことから、3期では、灯台へのまなざしと灯台からのまなざしが共存しているといえる。

4期において、犬吠埼灯台は文化遺産や文化財とし

てのまなざしを向けられるようになった。また、「観光地としての灯台」に関する記述では、犬吠埼灯台からの眺めについての記述がみられる一方で、灯台への眺めについての記述が増えている。「眼下に太平洋が迫る露天風呂。遠くには犬吠埼灯台」（『朝日新聞』2005・1・20・朝刊）というような、ホテルからの犬吠埼灯台への眺めや、「このほりが飾り付けられた白い灯台をバックに記念撮影する家族連れなどがみられた」（『朝日新聞』2005・5・2・朝刊）といった、デコレーションされた灯台への眺めについての記述がみられた。これらのことから、4期では、灯台へのまなざしが優勢であったといえる。

このように、犬吠埼灯台をめぐるまなざしの方向性は、1期においては灯台へのまなざしが優勢であったが、2期では灯台からのまなざしが優勢となった。その後、3期においては灯台へのまなざしと灯台からのまなざしが共存し、そして4期では再び灯台へのまなざしが優勢となった。

(3) 未来へのまなざしと過去へのまなざし

最後に、まなざしの時間軸について述べていく。1期では、灯台としての機能や技術が称賛され、これか

ら果たす機能や技術にまなざしが向けられていた。このことから、未来へのまなざしが向けられていたと考えられる。また2期においては、1期と同じく、これから果たす機能や技術にまなざしが向けられていることに加えて、観光地としてのまなざしが向けられており、犬吠埼灯台が観光地として捉えられている現在にまなざしが向けられているといえる。このことから、未来へのまなざしと現在へのまなざしが向けられていると考えられる。

3期では、文化遺産や文化財としてのまなざしが向けられ始め、また建設当時から果たしてきた機能や建設の技術が再評価されていることから、過去へのまなざしが向けられていると考えられる。一方で、GPS等の航海計器が発達したことにより、灯台の必要性が低下している中で、現在灯台が果たしている機能にもまなざしが向けられていることから、現在へのまなざしも向けられているといえる。そして4期において犬吠埼灯台は、文化遺産や文化財としてのまなざしを向けられるようになった。このことから、過去へのまなざしが向けられていると考えられる。

このように、まなざしの時間軸は変遷している。1期においては未来へのまなざしが向けられていたが、

2期では未来と現在へのまなざしが向けられるようになった。そして3期においては現在と過去へのまなざしが向けられ、やがて4期では過去へのまなざしが向けられるようになった。

(4) 変遷するまなざし

これまで、新聞記事の記述内容の分析から、犬吠埼灯台をめぐるまなざしの変遷について考察してきた。

1期では、灯台としての機能や技術にまなざしが向けられ、2期においては、観光地としてのまなざしが向けられるようになった。また3期では、灯台としての機能や技術に再びまなざしが向けられ、そして4期には文化遺産や文化財としてのまなざしが向けられるようになった。また、まなざしの方向性も変遷しており、1期においては灯台へのまなざしが優勢であったが、2期では灯台からのまなざしが優勢となり、3期では灯台へのまなざしと灯台からのまなざしが共存し、4期では灯台へのまなざしが優勢となった。さらに、1期では未来へのまなざしが向けられていたが、2期では未来と現在へのまなざしが向けられ、3期では現在と過去へのまなざし、そして4期では過去へのまなざしが向けられるようになり、まなざしの時間軸も変遷

している。このように、犬吠埼灯台をめぐるまなざしの対象や方向性、時間軸は、それぞれの時期の様々な社会的背景に伴って変遷しているのである。



明治の灯台の話(67)

八島(屋島)灯台

灯台 研究生



明治の灯台を建てた人たち

伊予灘から周防灘に向かう航路上に、ぐつと突き出したようにある山口県の最南端の島が八島です。その八島の南端に八島灯台があります。点灯開始は、明治42(1909)年7月1日、明治末期の灯台です。明治最後の年明治45年3月に刊行の航路標識管理所第四

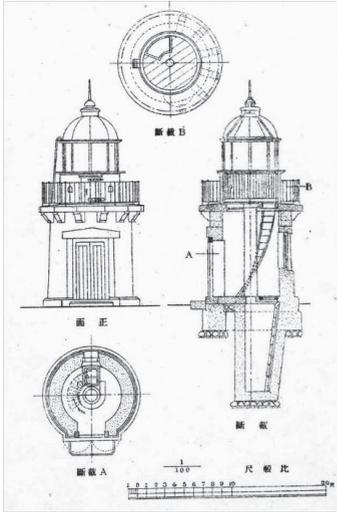


図-1 初代八島灯台
(第四年報付図より)

年報には、図と共に初代八島灯台の詳細な記録が見られます。

○屋島灯台

設計ノ概要

本燈臺ハ混凝土造 圓形白色ニシテ 基礎ヨリ燈火ニ至ル高サ十六尺(約5メートル) 地盤ヲ水面上高サ百六十四尺(約50メートル) マデニ削平シ 根切ヲ



図-2 八島灯台位置図

トシ 床面以下
深サ十尺ノ錘
重孔ヲ穿テ周
囲ヲ混凝土造ト
シ 昇降鐵梯子
ヲ付ス 燈塔側
壁ハ混凝土造ト
シ 入口地覆並
ニ踏段、錘重筒
受ケ、窓楣及
外縁並ニ持送り
等ハ花崗石造ト
シ 外縁上ニ錘

鐵製胴壁ヲ据着ケ之ヲ燈室ニ

点灯開始當時、灯台の名称は屋島灯台でした。初代の灯台（以下、屋島灯台）は小型のコンクリート造で、今日ある特牛灯台（明治45年・山口県）とほぼ同じ大きさでした。異なる点は、灯台入口にもある楣石（窓や出入口の上に水平に渡した石）や持送り（外縁の支え石・蛇腹石）など、従来の石造灯台のスタイルが継承されている点です。このため、図や写真だけでは、屋島灯台は石造灯台にも見えます。これらの装飾は、その後のコンクリート造灯台にはほとんど見られない屋島灯台の大きな特徴でした。

しかし、職員、家族が住む退息所は、灯台とは対照的な木造トタン屋根の粗末な造りであったことが、次のとおり見られます。

吏員退息所並ニ小使室及浴室、物置所共木造平屋建ニシテ屋根ハ亜鉛引浪形鐵板葺 外側下見板羽重ネ張トシ間仕切其他総テ和風構造トス

（中略）

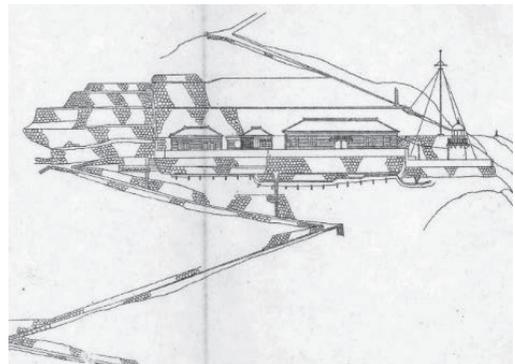
敷地前面及両側地端ハ石垣ヲ繞ラシ 背面山土切取肌ハ土留石垣ヲ施シ表裏門外ニ道路ヲ開通ス

以上四十一年
度七月七日起
工四十二年八
月十一日竣工

この屋島灯台建設工事に携わった人たちの秘話が、燈光昭和12年11月号の記事「思ひいづるまゝ」に記されています。記事

の作者「禹穰生」は、元燈台局職員「高井恵作」氏です。高井氏は、明治35年に燈台局の前身航路標識管理所に入所後、昭和4年の退官まで各地の灯台建設に會計担当、後に技手としても携わり、多くの燈光記事に灯台工事の裏話を残しています。

屋島燈臺の建築が始められたのは明治四十一年である。當時周防灘近傍に海難頻発し、門司神戸間来往船の為急設方各方面から要請相踵ぎ、目標位置としてそ



図一 3 屋島灯台全景之図
（第四年報付図より）

の重要性を認められたからである。そして、その建設
工事に出かけたのはソ技手とN書記で、ソ氏はすでに
退官鶴見方面に隠遁され、N君は今尚在職の人である。

当時燈臺(とうだい)予定地の測量や建築に関する事項は、工務
課新営掛(にいかけ)の分掌に属し、掛長には長く田中頼一技手(写
真一)が据わり、殆ど獨りで切廻された。田中氏は竹
田工務課長の信頼篤く、態度堂々として人柄好く風采
上り、しかも常に身装をくずさず、貫録を示してゐた。
初め書記の出で内務省の土木局(あたま)邊りに勤め、管理所に
轉じてしばらくして後に技手名義になった人である。
相当に筆もたち予算要求の理由書など定評あり、當時
氣むづかし家の町田主計掛長(後の會計課長)とは好
いコンビであった。要するに、書記で敲き上げた技術
者は総てに便利で、鬼に金棒と謂ふべきである。自然
氏が新営工事を思ふが儘に掌理し得たのも、故ある哉
である。

(中略)

屋島の燈臺に就ても、位置の測量、燈臺建築の事は、
一切田中氏に依って計画され且実施された。だから
ソ・N両君が出張されて敷地(せじ)截取の頃や、又工事の竣
工前頃に田中氏は現地の視察に赴き、指図や監督の任
に當った。



写真-1 田中頼一氏
(大正3年伝習生
卒業記念写真より)

田中氏が二度目の出張は四十二年の二月頃で、帰所
されて間もなく、私は會計の検査として出張すること
になった。當時辞令は逋信省(秘書課)から出し「出
納官吏金櫃帳簿及會計事務実地検査トシテ屋島燈臺
建築事務所へ出張ヲ命ス」と物々しく記されていた。
ソ技手は此の工事主任は二度目で、清水燈臺が最初
である。

N君は、會計主任として出張したのは此処が皮切り
で、次は藤井技手と共にケラムイの移築工事を受持た
れたのが、二度目であると私は記憶している。それは
明治四十四年に第一回視察で、同燈臺の前途官吏交替
の検査を命ぜられたとき、両君と會同したことを覚へ
てゐるからである。

この燈光記事と合致する辞令が、明治41～42年の燈臺公報に次のとおり見られます。

明治41年

技手 田中 頼一

・工務課新営掛長ヲ命ス（四月十四日）

・山口県下へ出張並ニ該出張中福岡県下門司市へ臨機出張ヲ命ス（四月十七日）

技手 山田徳太郎

書記 長富 英造

・山口県下へ出張ヲ命ス（六月二日）

技手 田中 頼一

・山口県下へ出張ヲ命ス（六月十九日）

明治42年

技手 田中 頼一

・山口県下へ出張ヲ命ス（41年十二月二十六日）

・山口県下へ出張ノ途次愛媛県下へモ出張ヲ命ス（一月七日）



写真-2 高井恵作氏
(大正11年伝習生
卒業記念写真より)

書記 高井 恵作

・出納官吏ノ金櫃帳簿及會計事務実地検査トシテ屋島航路標識建築事務所へ出張ヲ命ス（三月八日）

高井氏の燈光記事と出張辞令記録から、付属施設を含む屋島灯台の生みの親は、当時航路標識管理所の新営係長であった田中頼一技手と判断されます。田中技手については、拙稿61「屋形石灯標」で、建築用特殊コンクリートブロックを發明し特許を取得した優秀な灯台技師として既に紹介しております。また、五管区保管の伝承記録集には、前回の室戸岬灯台の建設工事の監督も田中技手であった記録が残されています。

屋島灯台の工事主任のY技手とは、山田徳太郎技手です。山田技手は、清水灯台の建設にも担当技手とし

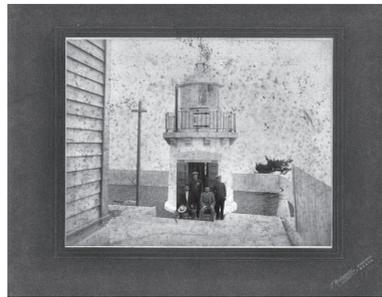
ての出張辞令の記録が明治44年の燈臺公報に確かに見られます。高井氏の記事では、清水灯台が最初とありますが、清水灯台より屋島が先のため、実際には屋島灯台が最初の灯台となります。山田徳太郎技手は、この後、初代伊豆大島、松前小島、震災復旧の勝浦灯台、女島、都井岬など、著名なコンクリート造灯台の多くを手掛けていたことが、工事出張辞令から確認できます。

N君とは、高井氏の後輩となる長富英造書記です。長富書記は退官後急逝し、燈光昭和14年4月号の追悼記事の中で、高井氏が次のとおり屋島のことを再掲しています。

さて、前にも本誌に書いたが、長富君が本官になって始めて建設場に出張したのは、山田徳太郎君（君も私と同年）が工事主任で明治四十二年に出来た屋島灯台である。

屋島灯台は、二人にとって最初に建設した記念すべき灯台でした。燈光会には、大判の台紙に貼られた撮影時期が不明の屋島灯台の写真（写真3）が保管されています。灯台入口上部の楣石に記念額がまだ無いこ

とから、撮影時期は竣工直後と推測されます。そして、この写真に写る灯台職員の前で椅子に座る正装した二人は、燈光昭和3年6月号の伝習生卒業写真の職員写真と照合した結果、若かりし頃の山田徳太郎（左・帽子携帯）と長富英造（右）のお二方であることが今回



写真－3 屋島灯台大判写真（右）とその一部拡大（左）
（周防柳井 松村写真館作製・燈光会所蔵）

判明しました。二人の安堵したような表情は、やり終えた工事が、最初にしては相当厳しかったことを訴えているように愚生には感じられます。

屋島灯台の過酷な生活

前記の高井氏の燈光記事の続きには、屋島灯台の設置環境が次のとおり記されています。

屋島の敷地は、急傾斜の殆ど断崖に等しい所を截展いた為、工事に無理があり、建物の配置にも相當の苦心が拂われた。つまり敷地が十分とれないので平地が狭く、勢ひ階段式となった。殊に明弧に付いては、西寄りの周防灘方面に不十分であった。斯様な譯で、自然降雨に因る石垣や敷地崩壊の被害も一再ならず、又八島部落への道も、燈臺の背後の山越の方は仲々の難路であり、部落から海岸に沿ひ、墓地を抜けて来る方は、平坦だが燈臺の近くで潮の為に通れない時もあり、在勤者の困難も容易でないと考えられた。細い作道に農牛の巨い奴が道一杯に寝そべり、人が近づくと白眼を剥いてチロツト睨む、どうも不気味だ。私は此処に出張して、夙に難場手當給与地相當なるを認むる旨を上申し、その後大正六年の視察に於ても同様の趣旨

を具申主張した。

前記の燈光会に保管の大判の屋島灯台の写真は、海上から撮影したもう一葉存在し、燈光記事の記載状況が容易に確認できます（写真4）。

燈光大正4年11月号には、灯台設置6年後の屋島灯台と八島の案内が、屋島灯台職員により次のとおり紹介されています。

八島の状況

屋島 K生

當八島は燈臺名は屋島なるも上関村大字八島な



写真-4 屋島灯台大判写真の一部拡大（燈光会所蔵）

り而して山陽線柳井津駅より約十里（約40キロメートル）中国航路室津港より五里（約20キロメートル）の海上にあり（柳井津ヨリ室津マデ毎日三四回ノ便船アリ）又上関村役場所所在地なる長島は室津港とは一韋帶水とも云ふに足らざる狭き瀬戸を隔て、直前にあり其間渡船賃金壹錢なり同所には岩國区裁判所の出張所あり銀行の支店もあり郵便局（無集配）もあり役場の建物も立派なり

八島は人家百五十人口七百位と聞けり學校は高等併置にして教員は校長外三名の男教員と一名の女教員あり生徒は百二十餘名にて一、二學年と四學級を編成して男教員にて受持ち女教員は裁縫を主とし時に唱歌を教へ又男教員の差支あるとき代て教授す燈臺より學校へは年報に示せる如く距離二十八町（約3キロメートル）にて非常に悪路難道なり降雨の際は立ること甚だしく且つ雨中より雨後にかけて巖石崩落して危険云ふ斗りなし尚ほ満潮の際通行し難き所二ヶ所あり部落内に四五の店舗あり雜貨日用品等大抵の品はあるも往々品切と價格の不廉なるは驚くべし然れば多く柳井町即ち柳井津駅所在地より購入し時には室津港にても購入せり柳井町は渡海船（一ヶ月一回、積

荷ナキトキハ二ヶ月間位出船セザルコトアリ）に託し室津は郵便船に託して購入す郵便は一ヶ月二十回（二日配達シテ一日休ミ）の定なるも海上だに静穏なれば日々往復せり最も燈臺への配達は部落と別箇なれば部落まで郵便物来着するも定則の一ヶ月二十回の外配達せず尚又海中の一小島なるに拘らず魚類は至つて不自由にて蔬菜は燈臺の畑は僅少の面積殊に風烈しく夏作は少しく出来得るも冬作は殆ど零に^{ほつ}其他は知人より分与を乞ふ位なり只春季に於ける石落は沢山なり茲に最も異とするは九月頃の「ヤズ」（鰯子）の期にて漁船は三四十艘来り是が魚の買入れに石油発動機船四艘も来ることあり此時のみは実に都の感あり

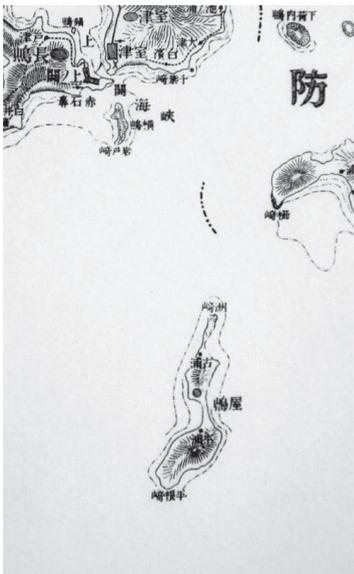


図-4 屋嶋と記された地図
(明治22年製 国勢図より)

島は「八島」なのに、点灯開始当時から「屋島」灯台としたのは、当時の海図が「屋島」としていたからの推論が、前記の高井氏の燈光記事に見られます。明治22年出版の日本国勢地図(図4)を見ると、「屋島」でもなく「屋嶋」と書かれており、「八島」の漢字表記は当時多用されていたようです。現在の「八島」灯台に変更されたのは、前回の室戸岬灯台と同じ、国土地理院と海上保安庁水路部とが協議した昭和42年11月でした。

八島は小さい島ですが、離島には珍しい裕福な暮らしぶりでした。多くの島民がハワイに移り住み、財を成した者たちが、西洋の文化や習慣を八島に取り入れ、コーヒーや洋食が当時から常用されていたことが、暦年の燈光記事にも見られます。また、明治中期以降島内で放牧が盛んに行われ、どこの家にも牛小屋があり、放牧と一体化した農業とイワシ漁(イリコづくり)の半農半漁で、その収入だけで子供を大学までやることのできた事実が、平成29年1月発行の季刊「しま」の八島特集記事に見られます。島には当時子供が多く、前記の燈光記事のとおり教育に熱心でした。灯台の子供たちは、学校のある八島の集落までは、山越えの道もありましたが、大人でも困難なため、通学路は断崖

が迫り満潮時に通行不能となる危険な海沿いの道を通っていました。人里離れた灯台で、近くにいつしよに遊ぶ友達も楽しみも少ない灯台の子供たちも毎日を懸命に生きていました。しかし、辺境の地で襲い掛かる病魔に幼い命はなす術ありません。大正7年7月号には、屋島灯台で短い一生を終えた女の子を慕う父親の記事が次のとおり見られます。

愛児を喪ひし悲しみ

屋島 小林生

大正七年一月二十二日 私にとつては如何なる悪日であらう 其は長女が漸く十二歳の春を迎えたばかりで永眠した日である。元来所謂蒲柳の質(ひ弱な体質)ではあったが當て病氣と云ふ病氣もなかつた當地へ来てからも夏の暑さも冬の寒さも厭はず通学して格別疲労した様子もなかつた 只脂肪の強きものは嫌ひであったから自然凍傷に罹り易かつた。一月十二日の午後五時頃に他の兄妹と共に学校から帰つて少し感冒の様だから服薬させたが 十三日は日曜で其日は昨年十月出生の三男の百日目の食初めであつたから心ばかりの祝をした 其れを喜んで食べた 十四日には學校へ行くと云ふから凍傷もあることだし強ひて缺席さ

した。そして服葉せしめたが、兩三日してから下腹が痛むと云ふから腸でも悪いかと思つたから、其葉も服用として居つたが、毎日退屈さうだから、妻が小切れなど与へた、其れで人形を拵へて着物を縫つて着せて遊んで居たが、二十一日好天氣で室内の大掃除をした。その時、幼児の處に行きアヤして笑つたと云つて喜んで居た。午後には門前の方を散歩して誠に元氣もよかつたが、二十二日私は少々不快で居つた。又幼児も一兩日來少し感冒の様であつたから、妻は其れを抱ひて長女と共に炬燵に入り色々話をして居た。其間に長女は幾度か私の方を見たさうだが、私は少しも知らなかつた。午前の中に妻に茶を入れてくれと云つて、夫れを呑んだ。最も小さい時から至つて茶が好きであつたが、近來餘り呑まなかつた。そして午後二時過ぎになつて、切りに目を擦るから妻が聞ひたら、眠いと云つた。それから又妻に「タオル」を濡らして來てくれと云ふから、何するかと聞けば、眠いから目を覚ますのだと云ふので、妻がさうせんでも眠ければ寢たらよからうと云つて、妻は一寸他へ立つた後に横になつた。其處へ妻が來て見れば、茶を吐いて居るので、私に手を貸せと云ふから、手伝つて起して見たが、最早殆ど絶息して居る。噫々其れから妻は大急ぎで村へ行つて船を雇つて

醫師を迎へたが、醫師の來た時は午後五時過ぎで最早注射も何も用をなさぬ。私が如何にも残念に思ふのは、其日長女と一口も話もせず終つたので、夫れが永遠に名残りである。而し茲に不思議な事は、一月初旬頃長女が昨年四月二十二日に死んだ私の母の話をして「おばあさんが死なれてから大分になりますね」と云い、また下関の學校で教えを受けた女の先生が、我々が此處へ來た年の暮に死なれた其話もしたが、更に此處の學校で冬季休業前に、朋友全部に「正月には是非皆さんで（灯台に）來て下さい」と云つたとか、其れが月は違ふが、祖母の命日の二十二日に永眠して、其朋友全部が來て見送りを受けたのは、決して偶然ではない。また茶の呑みしまひもしたなど、実に不思議である。

○長女の遺骸を野辺に送るとて
門出のいとど悲しや愛し子は
歸らぬ旅に上るなりけり。

○八島小學校の卒業式の席に列なり亡き長女を思ひ出して
去年迄は此席にも列なりし吾が子の
姿を見ぬぞ悲しき。

○亡き長女の學校に通ひし折を思ひうかべて
學舎に通ひし吾が子は今は
將た何處に行きて學びつるらむ。

亡くした子を慕う親の思いは、時代がどんなに経ても永遠に変わらないはずです。小林生の辛くやり切れない思いは、令和の愚生の胸に痛いほど突き刺さりません。

燈光創刊期の大常連「岩田春風」氏も、屋島灯台に看守長として勤務し、「屋島便り」と題した数多くの燈光記事を残しています。約百年前となる大正9年1月号の「屋島便り」には、それまで前向きで快活な記事が多かった春

風氏の記事には珍しく、屋島灯台の生活の嘆きが記されています。

島（八島）には可なり人もありますので、三十丁の原始的獣道を辿って行けば談客に差支えありません。併

し往復二時間を要するのと富士の山頂を巡る様な危険箇所がありますから詰員の外出は殆どないと云ってもよい位ひです。

(中略)

太公望は春の末から夏迄は幾分の漁もありますが、それとてホンの子供のイタヅラ式でありまして、燈臺生活上最大な娯楽である釣が駄目なので、一層孤島の淋し味を深らしめます。秋季になってアケビが背後の山林に實るので四五回子供達の縄張りを侵してみたと、四五回の初茸狩(而も十五六丁の距離)とが所謂外遊でした。

農事は猫額大の畑が三四枚づつあるので、春夏秋共大に骨を折ってみましたが、昨年末何も赴任と云ふ新参連とて、地方状態に馴れないので悉く失敗に終わりました。尤も畑が急傾斜地に點拓(てんたく)されてあるのと、御承知の通り瀬戸内海は一般に比して降雨の多いので、天恵の分布の欠けて居る故もあります。併し農事に相當の実験ある方ならば、差して自家用には不自由なく農作の出来る可能性があります。私共も明年は一ケ年の苦き帰納に依って救わるかとも考へて居ます。

兎に角、尤も不便な孤島で而も島の村から險悪な獣道三十丁を隔てた、そして急傾斜のそれこそ猫額大の



写真-5 上空からの屋島灯台と退息所
(昭和33年11月 中国新聞撮影)

狭い狭ひ敷地に建設された燈臺での生活とて、爾来に
經驗せざりし苦しき生活を違つて見ました。殊に入梅
から晩秋迄は百足の襲来と尺以上の蚯蚓の御訪問には
閉口いたしました。百足の如き四五寸大（約12〜15セ
ンチメートル）のものが時折蚊帳の中迄やつて来るの
で危険千萬であつた。従つて見當たり次第打き殺すの
で恐らく五六百は殺つた。数多く殺せば数学的の減少
はあるべくと大正の俵藤太（大ムカデ退治で有名な武
士）モドキで奮戦いたしました。又鼠の多いのに閉口
で鼠と鳥の被害は、農事失敗の三四割に及んで居ます。
鼠の如き四十頭以上も殺しましたが、到底滅亡しそ
うもないので毒殺をも並行いたしました。矢張無効で
した。仕方なく小猫を飼つて消極的手段も操つて居り
ます。幸ひ私は小鳥や犬や猫が好物なので、一つの娯
楽ともなります。タマチャン折角私を慰めて呉れま
す。呵々。（かた天声の笑）

斯様に淋しひ生活ですから読書でもと思ひますが、
生活難はそんな余裕がないので僅々二三部の新刊を
購求したに過ぎないのです。従つて心身両個の栄養不
良に突き落とさる、譯で、貧すれば所謂鈍するの例で
時潮を飛び越えた活き々々した生活圏にある人から見
たら、ボルネー邊の土人と甲乙の見分けがつくまい

と悲観して居ます。併し大正九年と申す世界改造第一
年の新歳には、乾坤一擲地球玉の一角を踏み臺に男性
的ラツパを吹く心組であります。

集落から遠く離れ、釣りや農作物の楽しみもなく、
病害虫に常に苛まれる屋島灯台の生活は、過酷極まる
ものだったようです。更に、灯台の生活に天敵の蛇が、
この年大量に出没し、同年11月号の屋島便りには、夜
の灯台の開き戸に五尺（約一・五メートル）もの青大
将が飛びかかるなど、半年あまりで3匹のママシを含
む10匹もの大小の蛇を撲殺した事実が記されていま
す。

令和の現在、八島灯台を管理する徳山海上保安部に
は、屋島灯台の経歴簿ほか屋島灯台で綴られた記録資
料が保管されています。屋島灯台には、点灯開始当時
から2名の職員が家族と共に退息所に暮らし、灯火を
保守管理していました。経歴簿の在勤者名簿には、前
記の燈光記事を記した柏木米蔵、小林仙造、岩田亀作
らの名が見られます。灯台はその後、戦火の被害もな
く、昭和26年3月には灯台の脇にコンクリート造の発
電舎が増設され灯台は電化されました。同年8月1日



写真-6 屋島灯台と発電舎
(当時の絵葉書 佐伯とも子様提供)



写真-7 二代目屋島灯台
(八島灯台航路標識原簿写真 徳山保安部保管)

に屋島航路標識事務所と組織としての名称は変更され
ますが、写真5のとおり、灯台も退息所も明治期のそ
のままでした。

昭和34年7月号の燈光に掲載の屋島航路標識事務所
の案内には、次のとおり列記されています。

・交通状況 山陽本線柳井駅下車、室津行きバスに乗
車、約一時間終点室津着、室津港より渡海船にて一

時間八島港に到着、八島部落より灯台間の山道は峻
険にて人がやっと通れる悪路(三料^キ余)で徒歩五十
分事務所に到着する

・教育機関 小中学校ともに八島にあるも通学不能
・医療機関 開業医なし 岩国市在、国立岩国病院八
島診療所あり(医師一名、看護婦一名)

・通信機関 事務所の加入電話あり

・日用品購入 不便、最小限の日用品は村内でどうに
か購入出来るが、三割位高価

当時、灯台の家族は八島の集落に家
を借り、職員だけが退息所に暮らすよ
うになっていました。同年10月号の燈
光の六管区の報告記事には、屋島灯台
は管内最大の難場灯台と紹介されてい
ます。翌年の昭和35年3月に灯台は近
代的な形状に改築され(写真7)、対
岸の室津から無線で監視されるよう
になり、職員と家族は室津の新しい官舎
に移り、屋島灯台は無人工化されました。
それから61年後の今年の夏、東京2
020オリンピックがメダルラッシュ

に湧き始めた最中、愚生も漸く八島灯台を訪ねることができました。

八島灯台の訪問

実は愚生は、2年前のG・W時に、八島灯台を見に八島を訪ねていました。現在の来島に異動して間もない時期で、島には何のつてもなく、情報は燈光の記事のみで、管内最大の難場灯台を見ておきたいとの思いから八島に向かいました。雨が降りしきる中、島に渡り、燈光記事のとおり集落から灯台へと海岸沿いを歩きましたが、急傾斜が迫る岩場に道など全くなく、Googleの地図を見ながら藪の中を、灯台へ続く山道も泥にまみれ探し回りましたが、痕跡すら見付けることは出来ませんでした。途方に暮れ集落に戻り、偶然出くわした昭和15年生まれのご婦人に尋ねると、海側の道も山越えの道も今は完全に無くなっていることを教えてもらいました。また、灯台への海側の道は途中で急斜面を2回上り下りする大変な道だったこと、灯台の家族が住む借家が集落にあり、週末に灯台から父親が来ていたこと、その借家に住む子供と一緒に小学校に通っていたことなども教えていただきました。また、島には今も多く多くの民家がありますがほとんど空き家で

島民は現在16名しか居ない島の現状も知ることができました。また、帰島していた広島在住の元島民の方と知り合うことができ、前記の季刊「しま」をはじめ、当時の絵葉書（写真6）や写真（写真8）など八島灯台の貴重な資料を、その後提供していただき、翌年のG・Wに再訪し、島の方の船にて一緒に灯台を訪ねることを約束していましたが、このコロナ禍のため断念していました。

今回の八島灯台の訪問は、徳山海上保安部の交通課長のご厚意によるものでした。交通課長とは、当所で



写真-8 屋島灯台と八島島民
(佐伯とも子様提供写真)

一年間同勤し、徳山への異動の際、八島灯台の見学希望を伝えていました。今期7月末の八島灯台の気象観測機の交換工事に伴い、その立ち合いに同行する形で念願の八島灯台を訪ねることができました。

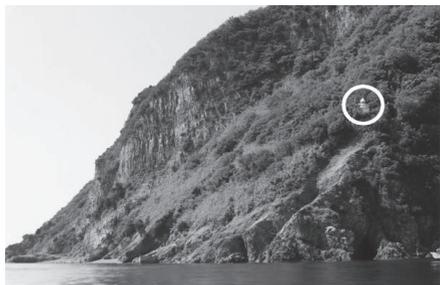
真夏の日差しが照りつける中、長島の四代港しんがから工業者のケイアイ電工の職員らと乗船し、灯台へ直行しました。業者の望月氏は、八島灯台の関連工事に多く携わり、太陽電池化前の電線経路が灯台への山越えの道だったこと、その電線経路の保守工事の際、野生化した放牧牛が人恋しさに工業者に近付いてきて離れなかつたこと、その放牧牛が山越えをして灯台に迷い込んだときは、急傾斜地のため戻すことが出来ず、灯台に人が居た頃は、その牛が食料として灯台に無償提供されていたことなどの秘話を、船上で聞くことができました。

灯台の船着場に着くと、集落へ向かう海側の道の痕跡が、わずかですが確認できました。船着場から灯台までのつづら折りの道は、雑草木々が生い茂り、完全に塞がれていました。灯台巡回周期の延伸と部署の過密な業務にマンパワー不足、どこの灯台も同じ惨状です。通常なら10分程度で上れるところ、蒸し返す熱さの中、汗だくで草木を伐採しながらの行軍は、灯台到達まで

35分を要しました。ようやく辿り着いた八島灯台の門前で、襲い掛かるアブの大量と闘いながら、みんなで飲み干した冷えたお茶の美味しさは忘れられません。

構内も雑草木々が生い茂り、退息所跡地に平成8年から設置された太陽電池パネルにも容赦なく木々が覆いかぶさっていました。灯台は、同年に発電機が撤去され付属舎が半分となり、平成3年に灯籠が往年の姿に戻され、二代目の灯台からも大きく様変わりしていました。幸いにもムカデ、ネズミ、ミミズ、蛇には遭遇しませんでした。至る所に巨大なフナムシと終始アブに襲われました。ジャングルと化した八島灯台構内は、屋島灯台の頃とは勿論全く様相は異なっていました。当時の門柱、石垣、コンクリート塀、石段、そして日時計の台座が、わずかに当時の面影を留めていました。生い茂る草木の中に佇むその光景は、宮崎駿監督の映画「天空の城ラピュタ」に描かれた世界のようでした。

灯台は無人工化され半世紀以上が経ち、今では巡回保守も年1〜数回となる現状では、やむを得ないことです。が、あまりにも変わり果てた姿でした。この地で職員や家族が命懸けで灯火を保守し、幼い命も犠牲になり、悲しみや苦しみを乗り越えて生きていた皆様に申



9 a_崖に切り立つ八島灯台（白丸）



9 b_屋島灯台時代の門柱



9 c_門前の貯水槽趾



9 d_日時計の台座と灯台へ降りる石段



9 e_現在の八島灯台



9 f_退息所跡地のソーラーパネル

写真－9 a～f 今日の八島灯台の全貌（令和3年7月撮影）

しわけないという思いが湧き上がっていました。この日は風も全くなく、気が遠くなるような真夏の暑さの中で、工事業者は気象機器の交換工事を着々と行い、徳山の交通課長と専門官は、工事立ち合い後、灯台に設置の244個もの蓄電池の保守点検作業を汗だくで行なっていました。湧き上がる思いと、そのような光景を目にし、皆様が守ってきた八島灯台に少しでもお役に立ちたいと、ソーラーパネル周囲の枝葉や、灯台に迫り来る信号柱跡地の木々を、つぐないの思いも込め夢中で伐採していました。

すべての作業を終え帰る際、亡くなった女の子のことを思い、最後に門前で合掌し、屋島灯台を後にしました。帰路の船中、船長からは春風氏の記事にあるとおり、灯台の近くは今も魚が採れない事実を教えてくださいました。現地に来て初めて知る事実や心揺さぶられる衝動は、机上で文献を調べるだけでは決して得られないものです。灯台史の研究に於いて、たとえ新しく一掃されていても、灯台の現地に来ることの重要性を、八島灯台で又教えられたような気がしました。

屋島灯台のレンズ

到達までに2年半近くを要した屋島灯台は、愚生に

とつても管内最大の難場灯台でした。コロナ禍が収束せず諦めかけていた中、今回訪問できたきっかけは、屋島灯台のレンズでした。同レンズの記録を調査したく、徳山の交通課長へ資料の提供を依頼したところ、ちょうど八島灯台工事が直近で予定されており、お忙しい中調整していただき、7月末のコロナの猛威直前に、奇跡的に訪問することができたのです。

屋島灯台のレンズは現在、岡山県玉野市にある渋川マリン水族館内に立つ御幸灯台みゆき内にあります。同水族館は、昭和28年7月に玉野海洋博物館として開館し、御幸灯台は同年10月に設置されています。灯台は、昭和天皇、皇后両陛下の同博物館の訪問に合わせて建てられ、これを記念し「御幸灯台」と命名されています。この情報は、インターネットで屋島灯台を検索している中で得た情報でした。

愛媛県が出していたコロナウイルスまん延防止等重点措置が解除されたのを機に、水族館に屋島灯台レンズの調査を申し入れたところ、元館長の坂口誠様の特別の計らいで見せていただけのことに、7月の初めに同館を訪ねました。御幸灯台は、見学できるようには造られておらず、内部の見学は行っていないため、レンズの一般への公開は恐らく初めてではないかとの

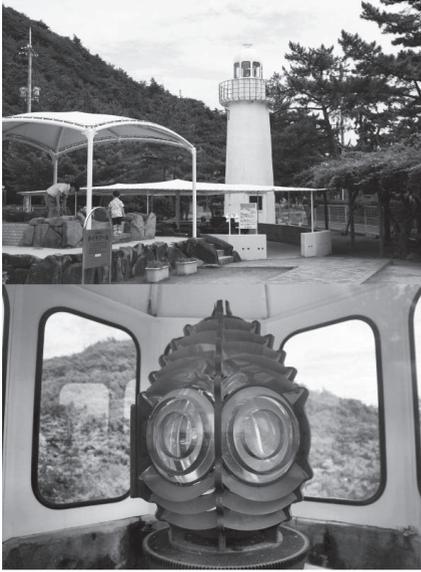


写真-10 御幸灯台と灯台レンズ
(令和3年7月撮影)

ことでした。灯台の中の直梯子を登り、レンズは灯籠内に水銀槽の回転装置とともに設置されていました。坂本様によれば、設置当初は夜間点灯（回転）させており、誤認防止のため海側を遮蔽し陸側に灯火を向けていたところ、付近住民から苦情を受け、その後は点灯も回転もさせていないとのことでした。回転装置は錆びついてはいましたが、回転部に付属のハンドルを取り付け回すと、わずかですが回転しました。レンズは第5等の6面レンズでした。台座には刻印がSAUTTERHARLE & Cie PARIS 1895と刻まれたフランス製でした。屋島灯台の点灯開始は、1909



写真-11 レンズ台座の刻印と回転装置
(令和3年7月撮影)

年のため、製造してから14年後に取り付けられたことになりました。ほとんどの灯台レンズは、点灯開始に近い年の製造（購入）であるため、このレンズは最初どこかの灯台に設置されていたものが、屋島灯台の点灯開始時に移設再利用されていたものと、その時は判断しました。灯台の説明板には、灯器は第六管区海上保安本部の提供により、かつて屋島灯台に使用されていたものと明記されていました。坂本様からは、現在レンズ等の灯台機器は、燈光会から借用した形で、以前職員の方も来られています。灯台設置当時の記録資料は何も残されていないとのことでした。

帰宅後、1893年直後に5等レンズを設置の灯台を調べたところ、翌年の1894年に三原瀬戸に設置の天下島灯台と百貫島灯台の2基が該当しました。その後の5等レンズの灯台は96年の姫埼、98年の馬島、03年の安芸白石と続きますが、どの灯台も明治期にレンズを変更（灯質・光達距離の変更）した記録はありませんでした。調べているうち意外なことに気付きました。2年前に愚生は、この特徴ある5等の6面レンズを目にしていたのです。このレンズには、他のレンズには見られない刻印が内向きである珍しい特徴がありました。今治市天下島の集会所で保管されていた天下島灯台の5等レンズが、6面の形状も内向きの刻印も今回のレンズと全く同じでした。

この謎を解明したく、徳山の交通課長にお願いし、屋島灯台のレンズに関する記録資料を送付いただきそれをきっかけに八島灯台訪問が実現した次第です。そして資料を調査した結果、また意外な事実が分かりました。

屋島灯台の財産台帳簿には、御幸灯台設置2年前の昭和26年3月31日に、確かに従来のレンズは撤去され、第5等不動レンズに交換されていますが、点灯開始時から同日まで設置されていた従来のレンズは、御幸灯



写真-12 天下島灯台レンズと刻印（令和元年7月撮影）

台のレンズとは異なる第5等大小2面形レンズとなっていました。

実は、同じ様な記録が、燈光会保管の昭和10年に作成されたレンズ調書にも見られます。そこには、屋島灯台のレンズはソーターハラー社製の第5等2面レンズと書かれています。同調書は拙稿で何度か引用していますが、誤記も含まれているため、参考資料としています。ちなみに、同調書に記載の第5等6面レンズは、ソーターハラー社製の天下島灯台と百貫島灯台、そして明治25年の国後島計羅武威岬灯台の3基だけでした。

徳山海上保安部には、撤去後の屋島灯台レンズに関する記録はありませんでした。現在、洪川マリン水族

館にレンズが存在することも全く伝えられていませんでした。そこで気になるのは、百貫島灯台のレンズです。同灯台を管理する尾道海上保安部の近藤次長に確認したところ、点灯開始時のレンズは、昭和27年4月にビーコンレンズに交換され、回転装置ごと撤去されており、その後の行方はやはり分からないとのことでした。撤去されたレンズは、同保安部保管の百貫島灯台折射器^{かきんぼ}取簿には、確かに6面のレンズと記録されています。

御幸灯台が設置された事実を伝える当時の山陽新聞が、岡山市立図書館に保管されています。昭和28年10月24日付の記事には、写真（写真13）付きで紹介されていますが、次のとおり屋島灯台のレンズとは書かれていませんでした。

（その手前東寄りには珍しい、白亜の燈台が立っている。これは今後同館附属施設として六十九万九千円で建設されたもので、両陛下の今度のおいでを記念し「御幸灯台」と命名されている。この燈台は高さ十メートル鉄筋コンクリートづくりで海に向った面を遮へいし実用に供さぬ点だけが違う本物の燈台である。光器も第六管区海上保安本部の協力で六千燭光、光達距離十



写真-13 建設当時の御幸灯台
(山陽新聞 昭和28.10.24掲載)

一マイルのものを備えてある。

屋島灯台の経歴簿には、レンズが交換される前の要目は、新聞記事と異なる八千燭光、光達距離二十マイルで、同じく百貫島灯台の経歴簿には、一万燭光、光達距離二十二・五マイルと、こちらも違う要目が見られます。昭和24年2月刊行の燈台表も確認しましたが、両灯台とも同じ表記で、管内には六千燭光、光達距離十一マイルの灯台は、残念ながら見付かりませんでした。

昭和28年10月27日付の山陽新聞には、前日の26日に両陛下が海洋博物館を見学され、予定より30分も長く



写真-14 御幸灯台と昭和天皇
(岡山県の自然と文化 郷土文化講座24
掲載写真 H17.3.21発行)

居られたと伝えていきます。当時、玉野海洋博物館のよ
うな本格的な水族館は少なく、海洋生物に専門的な知
識をお持ちの陛下には、もつとも楽しいご視察場所の
一つだったように見受けられたと報道されています。

御幸灯台のレンズは屋島灯台のレンズではないよう
にも思われますが、果たして真相はいかがでしょうか。
記録から判明したのは、御幸灯台ができる直前に、屋
島灯台の5等レンズと百貫島灯台の5等レンズが、両
方とも灯台から取り外されていたことです。

(明治の灯台の話67 八島(屋島)灯台)

屋島灯台に関する多くの貴重な記録を提供いただき
灯台へも案内いただきました徳山海上保安部交通課長
野村征彦様、八島及び屋島灯台の貴重な資料を提供い
ただきました佐伯とも子様に対しまして、この場を借
りて改めて深謝いたします。



一 管 区

地元小学生による紋別灯台見学会！

7月15日(木)紋別海上保安部交通部
では、オホーツク海沿岸にある雄武町
立共栄小学校からの社会科見学の申し
入れに対応し、紋別灯台の見学会を
実施しました。

紋別海上保安部では、例年、地域と
連携して灯台の一般公開を実施してき
ましたが、近年は新型コロナウイルス
感染拡大防止のため、一般の方々に灯
台を見学してもらう機会が減っている
ことから、せめて、小中学校の児童や
生徒に海上保安庁に興味を持ってもら
おうと、職場体験学習や社会科見学を
検討しました。交通課として最近、紋

別管内において灯台絵画コンテストの
応募が減少していることから、灯台見
学をセットにして地元教育委員会を通
じて働きかけてはどうかとの意見がで
て、部内でも検討を重ねた結果、この
案に巡視船の船内見学を合わせた形で
実現に至りました。

雄武町は紋別市から北に約60キロメ
ートル、オホーツク海沿岸中央部に位
置する人口約4500人の小さな町
で、当日は同校の全校児童3名(小
1、小4、小6)と教職員3名の計6
名が当部を訪れました。

紋別灯台ではそもそも灯台とは何な
のかや、仕組み、役割等を説明した後
に実際に灯台に登ってもらい、少人数
であったということもあり灯台の踊り
場に出てオーシャンビューを一望して
もらい、児童からは「きれい」、「どこ
までも見える」と大好評でした(写真
1)。また、見学中も積極的に灯台に
関する質問がでる等非常に有意義な見
学会でした。



写真2



写真1

見学会終了後は、灯台絵画コンテストに応募してもらうため、紋別灯台をモデルに写生会も実施しました（写真2）。時間の都合上、写生会は一時間弱しかとることができませんでしたが、児童の皆さんはのびのびと絵を描いてくれました。

（紋別海上保安部交通課）

五管区

姫路海上保安部ホームページ

リニューアル

姫路海上保安部では、令和3年8月にホームページをリニューアルしました。

今までのホームページは、TOPページが縦長で画面をスクロールしなければ、全体を閲覧出来ないものでしたが、スマートフォンやタブレットにも対応できるように1画面で閲覧可能となるシンプルなものとし、各項目内も

容易に検索できるように、トップ又はクリックするとプルダウンメニューが現れ、閲覧したい項目を容易に検索できるよう利便性を高めました。

本改修にあたっては、プログラミングの知識がある、姫路海上保安部交通課若手職員が中心となって改修を進めました。

現在は、小学生以下を対象とした当部の活動や海に潜む危険を周知するためのキッズコーナーを作成中で、内容も充実させて閲覧者を増やし、姫路海上保安部の活動を市民の方に知っていただく機会を増やしていきたいと思っています。

（姫路海上保安部）



お知らせ

[過去のお知らせはこちら](#)

令和3年6月7日 第22回未来に繋そうまい海・海上保安庁認識コンクール～作品大募集～こちらをご覧ください。

令和3年4月17日 ウォーターセーフティガイドが改定されました。
[サイトはこちら](#)

令和3年3月31日 霧海難防止キャンペーン実施中 3/1～3/31

海上保安官フエスタin 海みらい図書館！

金沢海上保安部は、令和3年6月19日（土）に金沢海みらい図書館が主催した「海の警察」海上保安官フエスタin海みらい図書館」に参加しました。

このイベントは、海上保安官の活動や海の安全について、海上保安業務の紹介用DVDの上映や業務

紹介パネル展示、第二種制帽のパーパークラフトの作成体験、救難資機材や潜水服等の展示を行い（写真1）、来場者との交流を図りながら海上保安業務のPRを行うもので、今年で8回目となります。

金沢海上保安部交通課からは、LED灯器展示、大野灯台と旧金石燈台のペー



写真1



写真2



写真3

パークラフト展示、石川県内の主要な灯台3つ（大野灯台、加佐岬灯台、緑剛崎灯台）の紹介パネル展示を実施しました（写真2）。

当日は雨模様でしたが、家族連れの利用者が多く来館し、子供たちがパネルを見て「海上保安庁ってなに？」や、LED灯器を指差して「これって何に使うの？」など様々な質問が飛び交いました。職員は、灯台の役割や普段行っている灯台の保守などに使用す

る機器を使いながらわかりやすく説明しました。子供たちも灯台の仕組みに関心を抱いたようで、真剣に話を聞いていました（写真3）。また、来館した方の中には、灯台の点検を海上保安庁が行っていることにびっくりされている方もいました。

今回のイベントをきっかけにより多くの人に灯台に興味をもってくださる事を願っています。

（金沢海上保安部）

釧路埼灯台の思い出大募集

釧路海上保安部交通課

釧路埼灯台は、北海道の開拓と殖産興業が強化されつつある明治中期に釧路市米町へ設置された沿岸灯台で、1891年（明治24年）9月1日に初点灯した後、二代目（1952年）、三代目（2001年）と姿を変えながら、釧路の港や沖合を行き来する船舶の安全を見守り続け、今年130周年を迎えることとなりました。

釧路海上保安部では、釧路埼灯台130周年を記念して、同灯台にまつわる思い出話等のエッセーや写真を募集しています。

1 応募期間 令和3年9月末まで

2 募集作品

釧路埼灯台（初代、二代目、三代目いずれか）にまつわる次の作品。

(1) 思い出話等のエッセー（400字から600字まで）

(2) 写真（写真はA3サイズまで、デジタル画像はJPEGのみ3MBまで）

3 応募方法

(1) あなたのお名前、郵便番号、住所、年齢、電話番号等を明記のうえ、郵送、持参、ファックスまたはEメールいずれかの方法によりご応募ください。
(2) 詳しくは釧路海上保安部ホームページをご確認ください。ただか、電話によりお問い合わせください。

4 お問い合わせ先

〒085-0022 北海道釧路市南浜町5番9号

釧路海上保安部交通課

電話0154-21-5575

（対応時間：平日の午前8時30分から午後5時15分まで）



釧路海上保安部
ホームページ



釧路埼灯台（三代目）



@平安名埼灯台

「美ら海灯台」

フォトコンテスト2021

～灯台の魅力 再発見!!～



【応募期間】

令和3年
9/17 (金)

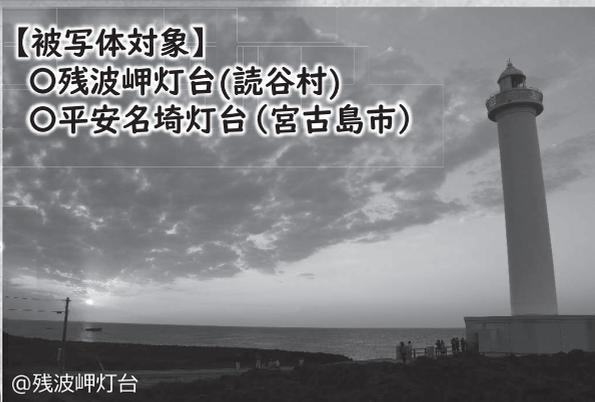
11/7 (日) 必着

感染防止対策をして
参加してね!!



【被写体対象】

- 残波岬灯台(読谷村)
- 平安名埼灯台(宮古島市)



@残波岬灯台

海上保安庁マスコットキャラクター
うみまる

【応募方法】 対象灯台が含まれる写真(画像データ)を下記の応募先まで送付して下さい
(詳細は、第十一管区海上保安本部ホームページ・海上保安庁公式Twitterを確認下さい)

【応募先】 郵送の場合:

住所 〒900-8547 沖縄県那覇市港町2-11-1那覇港湾合同庁舎

第十一管区海上保安本部 交通企画課

(Tel.098-867-0118 内線:2617)

Eメールの場合: jcgbkotsukikaku2-8y2a@mlit.go.jp

応募の際は ①作品のタイトル ②対象灯台(残波岬・平安名埼) ③作品のコメント ④撮影時期

⑤氏名 ⑥年齢 ⑦住所 ⑧連絡先(電話番号・Eメールアドレス)を記載して下さい

【投稿はこちら】



主催 催: 第十一管区海上保安本部

後援 催: 宮古島市・読谷村

協力 援: 沖縄県・(一財)沖縄観光コンベンションビューロー・(株)FMよみたん・
(株)エフエムみやこ・(公社)燈光会・(公財)海上保安協会沖縄地方本部・
(一社)読谷村観光協会・読谷村商工会・(一社)宮古島観光協会
(順不同)

協力: 沖縄県写真協会



【十一管区HP】



【海保Twitter】

伊王島灯台

伊王島灯台

150th
LIGHTHOUSE
ANNIVERSARY

長崎港の玄関口に明りを灯し続けて
今年**150周年**を迎えます！



灯台の要目

・点灯年月 明治4年7月

・灯質 (灯台の光かた)

毎回30秒に白色の光が4回光る



・光達距離 (光の届く距離) 約3.8 km

(伊王島から西海橋までの距離)

・灯台の高さ 約11 m

本年度150周年を記念したイベントを開催予定です！

長崎海上保安部 交通課 長崎市松が枝町7-29 電話 095-829-2819 <http://www.kaiho.mlit.go.jp/07kanku/nagasaki/>

昭和三十一年九月二十五日
第三種郵便物認可
（隔月一回五日発行）

「燈光」

九月号
第六十六卷
第五号

